



2016.12 No.**57** 

# 京都大学総合人間学部広報

特集 総人・人環学生研究プロジェクト 2015 「はかる」			
2015 年度募集要項			
研究課題1:流行を企図(はか)る――ベトナムの国民的スポーツ「研究概要(申請書より)			-
研究課題 2:「総合人間学」はいかに活きうるのか 研究概要 (申請書より)			-
学部卒業生インタビューにみる学問的経験の「実用性」(インタビュー掲載:木南陽介さん(平成10年卒)/小野邦彦さ渡辺雅之さん(平成9年卒)/井坂信彦さん	吉川 らん(平成 19 <sup>3</sup>	将平 年卒)	
学生自主研究プロジェクトの企画を終えて		• • •	
新任の先生方より			
精神病理学への誘い	松本	卓也	
二人の先生から学んだ姿勢	柴田	悠	
研究を他者に語る	木下	千花	
「誘惑」としての授業	武田	宙也	
教養部で掴んだきっかけ	足立	匡義	;
lernen と studieren、その違いが大事	細見	和之	;
京都大学総合人間学部という「場」	太田	出	:
着任のご挨拶:京都からアイルランドへ、アイルランドから京都へ	、池田	寛子	
研究のきょかけけ	<del>-1-1</del> #	十並	

### 特集 総人・人環学生研究プロジェクト 2015 「はかる」

今号では、学際教育研究部と総人・人環活性化委員会による「総人・人環学生研究プロジェクト」3回目のテーマ「はかる」を取り上げました。

一次審査、二次審査(2015年7月3日(水))を経て採択された2件の研究プロジェクトについては研究費が助成され、その研究成果は、2016年3月23日(水)の報告会にて発表されました。

それぞれの研究プロジェクトについて、申請書から活動の概要を示していただき、また総括として、総 人・人環活性化委員会委員長の佐野 宏先生よりご寄稿いただきました。

#### 2015 年度 募集要項

#### 2015 年度研究テーマ: 「はかる」

#### 図る 測る 計る 量る 謀る 諮る 世の中のあらゆる"はかる"をご自由に

総合人間学部、人間・環境学研究科では、大学院生のアドバイザーのもと、2回生以上の学部生が代表者となり、提案するテーマについての意欲ある学生研究プロジェクトを助成します。日々の講義を受講するなかで身につけた視点や、研究の方法を使って、独創的な研究を行うことを期待します。新しい観点の創出や、研究方法の開発も含めて、自由に考え、自己批評を繰り返して結論を導いてください。研究結果の学術的意義は問いませんが、自分たちの研究成果を研究発表形式で報告してもらいます。

#### 募集件数:3件

助成金額: 1 件あたり 10 万円 (予定)を助成。物品費・消耗品費・旅費・講師招聘旅費・研究会会場利用料・人件費(謝金)等、ただし、懇親会費・飲食費は支出できない。

研究期間:平成27年7月1日~平成28年3月31日(研究成果報告会を平成28年4月中旬に行う)

#### 研究代表者の応募資格:総合人間学部2回生以上

総合人間学部 2 回生以上を代表者とする 3 名以上 10 名以下の研究チームを組織すること。チーム構成員の学年・所属学部は問わないが、必ず 1 名以上の人間・環境学研究科所属の大学院生をアドバイザーとすること。

大学院生を自力で見つけられない場合は、下記のアドレスへ相談のこと。複数の研究チームに属して応募することは不可。

応募方法: 研究チームの組織表、当該テーマに対する研究目的と意義、研究計画について別紙の様式にまとめて、下記アドレスに、PDF ファイルもしくは Word ファイルで提出のこと。この企画についての問い合わせも同じアドレスにして下さい。

E-mail: soujinkan.project@gmail.com 申請書様式は下記からダウンロードして下さい。

URL: http://ganesha.phys.h.kyoto-u.ac.jp/project.html

応募 🗸 切: 平成 27年6月20日

主催:学際教育研究部、総人・人環活性化委員会

特集 総人・人環学生研究プロジェクト 2015「はかる」 研究課題 1 流行を企図(はか)る——ベトナムの国民的スポーツ「ダーカウ」の実践的研究

### 研究概要(申請書より)

**研究代表者**: 申 大樹 (文化環境学系 4 回生) **研究期間**: 平成 27 年 7 月 1 日~平成 28 年 3 月 31 日 **研究組織**:

- ·尾崎 純 (人間科学系 4 回生)
- ・岡田正太郎(経済学部経済経営学科 2 回生) アドバイザー
- ・山﨑 雅広(人間・環境学研究科共生人間学専攻 修士課程1回生)
- ・広瀬ケーナ(アジア・アフリカ地域研究研究科東南 アジア地域研究専攻修士課程2回生)

#### 研究目的

#### 1) なぜこの研究を思いついたのか、研究のめざす目的

岡田が見つけてきた一本の Youtube 動画に、私達は魅了された。ベトナムの公園で、老若男女さまざまな人々が輪になって、おもりの付いた羽根を互いに蹴っている。そのラリーは単調な蹴り合いではなく、肘、頭で遠くへ飛ばしたり、視界の外にもかかわらず背後で蹴るなど、芸術的なまでの安定感を示していた。かっこいい。心からそう思った。

すぐに羽根を注文し、その日から私達のダーカウ・ライフが始まった。毎週練習を積み重ねるにつれ、ダーカウの想像以上の魅力が明らかになっていった。羽根一本で簡単に始められ、コートや設備の必要がないため、容易に生活習慣へ運動を導入できるという健康上のメリット。1人から10人以上まで、道路から中庭まで、人数と場所を選ばない可塑性。そして、1時間も練習すればラリーができる敷居の低さと、体力がない人もパフォーマンスできる領域に到達できる奥の深さ。もっとたくさんの人にダーカウの楽しさを知ってほしい。そう考えて普及活動を始めるにあたり、ひとつの疑問が浮かんできた。

どうしたら日本でダーカウを流行させることができるだろうか?ベトナムの公園で日常化した風景を、日本でも見られるようにする道筋はあるのだろうか。方法としては、公園での仲間を増やす、ウェブを通じた宣伝・ロコミ、羽根や靴の入手を容易にする、学内サークルや大会といった形式を整える、などが候補に浮かぶ。しかし、ダーカウの大きな特徴は、公園で

誰でも参加できるという「開かれたスポーツ」という点だ。これはスポーツ自体の知名度の問題であると同時に、その開かれた遊び方を文化として定着させるという問題でもある。こういった目標のためには、既にそれが達成されている状況から学ぶ必要がある。ゆえに関心の焦点はむしろ、ベトナムの公園に絞られる。

一方で、ダーカウのもう一つの特徴は、その足技が不特定多数を魅了する、パフォーマンス性を持っていることである。現代のエンターテインメントは、普通は資本の投入とマスメディアの動員により、手の届かない場所で作られた流行を、一般市民が受け取るという構造によってなされる。しかしダーカウの現状は、厳しい訓練を積んだプロスポーツ選手や大道芸人ではない、一般の市民が公共の場で行きずりの人を感心させるという状況を呈しており、それ自体がエンターテインメントの演じ手と受け手(あるいは売り手と買い手)の境界を融解させ、新しい形のコミュニケーションを誘発する可能性を持っている。このような状況を分析し、社会に対する参与のひとつのあり方として位置づけられないか、という構想が可能である。

問題を整理しよう。私達の関心は、ベトナムにおけるダーカウという興味深い現象を通じて、A. 流行が生成し、普及・定着するための条件はなにか B. 公園という都市的公共空間において、いかに開かれた共同性が実現しているか C. 一般市民が公共空間で他者を魅了するということが、いかなる意味をもつかといった点にある。これらの問いに回答を与えることが、本研究の目標となる。

#### <u>2)アピールしたい点</u>

本研究の独自性のひとつは、これまで計画側から 語られることは多くとも、利用側から語られることの乏 しかった公園などの公共空間について、利用者とし て参与しながら詳しい観察をすることにある。加えて、 「普及」という過渡的な現象に着目し、自らそれを起 こすという積極的な態度で研究するという、典型的な 学術研究とはやや異なる目標設定に特色がある。

また本研究は、それぞれバックグラウンドの異なる

メンバーが関わっている。申は文化人類学、岡田は 経済学、山崎は現代思想を専攻し、広瀬に関しては ベトナムを自身のフィールドとしており、各人の知識 と経験を出しあうことにより、より広い視野でひとつの 現象を捉えられることが期待される。問題設定も、関 連するキーワードとしては都市計画・地域研究・身 体性・共同性・マーケティングなどが想定され、幅 広い分野の先行研究を基礎として研究を進めること になる。

さらに、本研究の延長線上にあるダーカウの普及は、日本におけるスポーツの日常化でもあり、普段 運動をしない層や、子供・高齢者の健康に資するという可能性を持っている。一方でこの普及活動自体がひとつの文化交流とも捉えられ、長期的には日本・ベトナム間の人的交流の発展へと繋がるであろう。

#### 研究の具体的な進め方

#### ■研究の方法

長期的には日本におけるダーカウの普及へと注力したいが、9 か月間のうちにその目標を達成することは困難である。本研究はむしろ、その大目標のための一里塚であり、普及活動を試験的に継続しながらも、軸足を調査に置く。

本研究は3つのステップによって行われる。

#### 1. 予備調査

主として先行研究の調査を行う。1 か月に1 度程度のミーティングを行い、成果の報告と分担の再設定を行う。

#### A. 流行が生成し、普及・定着するための条件はな にか

先行研究としては、まずエベレット・M・ロジャーズ 『イノベーター普及学』が挙げられるだろう。ロジャー ズは市場における新商品への態度で消費者を5つに 分け、そのうち2番めに積極的な「アーリーアダプ ター」が市場に与える影響力を重視した。ただし本 書はしばしばマーケティングの文脈で引用されるもの の、初版はインターネットすら誕生していない40年以 上前のものであり、その後の研究動向をフォローアッ プする必要がある。

加えて、東南アジア発祥のスポーツとして既に一 定の知名度のあるセパタクローや、大学スポーツとい う形で対象を限定することで知名度を上げたアルティ メットなど、参考になりうる他スポーツの普及史を概観 する。

## B. 公園という都市的公共空間において、いかに開かれた共同性が実現しているか

公園での輪の形成やメンバー構成について、実地研究に役立ちそうな先行研究は、生物が空間をさまざまに構造化し、特に私的空間と公的空間の感覚は文化的なものだと論じたエドワード・T・ホール『かくれた次元』など、都市社会学・社会心理学がひとつの軸となる。

#### C. 一般市民が公共空間で他者を魅了するという ことが、いかなる意味をもつか

これは難しい問いであるが、ヒントとしては関根康正を代表とする共同研究が、自己監査的に生活を均質化してしまう傾向に、ローカル・ノレッジやストリート・ノレッジが抵抗する役割を果たしてきたという路線のもと、フィールドワークに基づく大部な成果を出版している(国立民族学博物館調査報告80『ストリートの人類学上巻』、同81『同下巻』)。このような成果を必要に応じて吸収する。

並行して、フィールドワークのため日常会話程度の ベトナム語を修得することを目指す。また予備調査や ベトナム語習得の進捗状況に応じて現地調査の内 容やスケジュールを設定する。

#### 2. 現地調査

申と岡田がベトナムに赴き、継続的に街中その他でのダーカウに参与するほか、現地のダーカウ団体や、ダーカウ好きの日本人に連絡を取るなど、ベトナムにおけるダーカウの実態を把握する。またダーカウ関連商品の販売状況や形態についても調査を行う。ただし、本研究が焦点とするのはあくまで公共空間におけるダーカウであり、ダーカウ団体が主眼としている競技ダーカウの世界については扱わない。時期・期間は渡航経験者のアドバイスのもと決定する。

#### 3. 総括

報告会での発表と、共同での小論文の執筆によって総括を行う。研究期間終了後は、研究成果を日本でのダーカウ普及活動に活用していく。

#### ■経費の使用方法

ベトナムへの 2 人分の渡航費用(時期によって異なるが航空券代往復約 4 万~5 万円 / 人)で大半を使うと想定される。残余があれば上記の予備調査にかかる参考文献や語学書、ダーカウ用具の購入に使う。この時点で10 万円の枠は超過するであろうから、その分はメンバーで負担する。

特集 総人・人環学生研究プロジェクト 2015「はかる」 研究課題 1 流行を企図(はか)る――ベトナムの国民的スポーツ「ダーカウ」の実践的研究

### 研究成果発表会プレゼン資料

#### スライド 1

# 流行を ベトナムの国民的スポーツ「ダーカウ」の実践的研究~

2016/3/23「はかる」プロジェクト報告会 申大樹・岡田正太郎

#### スライド4

南北におけるダーカウの相違

- •1.器具の相違
- •2.グループ形成の違い
- •3. 「魅せ方」の違い
- •4.グループ構成員のジェン

#### スライド 2

#### ダーカウとは

- 「足でする羽根つき」
- 中国発祥、ベトナムで普及
- 対戦競技もあるが、 ベトナムでは公園での 日常的スポーツとして盛ん
- 曲芸的な要素がある



(写真 代表的なサイゴン型のカウ)

#### スライド3

#### 調査日程(概要)

- 1/21 申、ホーチミン市へ
- 2/5~2/14 テト (旧正月) 期間 • 2/9 岡田、ホーチミン市へ
- 2/12~2/20 ハノイ市
- 2/23 ホーチミン市出発



(写真 ベンタイン市場:サイゴンの夜は長い)

#### スライド 5

#### 1.器具の相違

- ・バネ個数/大きさ →跳ね具合
- ・ハノイタイプはバネという より歴史的な「コイン」の 形状を残す



(写真 左から競段用・ハノイ型・サイゴン型のカウ)

#### スライド 6

#### 2.グループ形成の違い

- ホーチミン市
  - 正対した二組
  - 人数は二人が多い



- 環状に広がる
- 人数は様々、 10人以上いる時もある





(写真 上)サイゴンに多い正対ラリー 下) ハノイに多い環状ラリー)

#### スライド7

- 3. 「魅せ方」の違い
- ホーチミン市
  - 足の裏、足の外側を使って カウを高く蹴り上げる。



パフォーマンスは3種類に分類できる。 1ホーチミン市の様なパフォーマンス 2フリースタイルフットボールに似たパフォーマンス

3カンフーのように見えるパフォーマンス

(写真 ダーカウ・キエンの足技「ダーソーボン|)

#### スライド8

### 4.グループ構成位のジェンダー

- ホーチミン市
  - 男女比に大きな偏りは見られなかった。そもそも二人組のカップルが多い。体を素早く動かす動作(=フィジカルな要素)が少ない
- ・ハノイ
  - 8対2程度で男性が多い ダーカウがサッカーと近い立ち位置 魅せるにはフィジカルな要素が含まれる

#### スライド 10

#### スポーツの普及

- 普及学における普及の要因
  - 相対的優位性
  - 両立性
  - 複雑性
  - 試行可能性
  - 観察可能性
- 普及対象としてのスポーツ
- 成果の評価が難しい
- 成果の評価と関係が薄いものは両立性・複雑性・試行可能性
- 技能獲得が重要

#### スライド 11

#### ホーチミン市におけるダーカウの習 熟

- 習得状況における3つの分類
- 1,離れた距離で安定してラリーを続けられるグループホーチミン市で最も多く見られるグループ 4人から6人ぐらいのことが多い
- 2,至近距離であればラリーを続けられるグループ 二人組のカップルに多く見られる
- 3,続くラリーの回数が1回ないしは2回のグループ 学校の授業でダーカウをしている生徒たち

#### スライド9

#### ダーカウの普及について

- 1スポーツの普及
- 2ベトナムにおけるダーカウの習熟
- 3 普及的側面から見たダーカウ

#### スライド 12

#### 普及的側面から見たダーカウ

- ダーカウは試行可能性が低い
  - ある程度習熟するまでは楽しめない実際、授業以外で三つ目のグループは殆ど見られなかった。
- 習熟するに従って労力が下がる
  - フィジカルな要素が少ない。習熟すればほとんど動く必要がない。
  - 予備動作の例が象徴的
- 他のメジャーな競技は試行可能性(習熟していない時点でも楽しめる)

#### スライド 13

#### 観察:公園ダーカウの成立条件

- 物売り
- 空間形状
- 呼名性
- 占有
- 舞台裏感覚



(写真 公園設備をネットに見立てる)

#### スライド 14

#### 物売り

- 「提供されているもので遊ぶ」という側面
- リータイトー公園では、提供されているものが優 占 (レンタル含む)
  - リータイトー公園 (特に西側) のもう一つの特徴と して、遊び手は子どもに限定されるという文脈性・西側との対比
- 物売りがいない公園もある。



(写真 ハノイの公園の物売り)

#### スライド 15

#### 空間形状

- 広い空間があればいい? というわけでもない
- 閑散時間帯のダーカウ、広い空間より細長い空間の選好
- 道路は「滞留」だが、公園は「方向付け」か目的が真逆のものを含みこむ。行動が含む視線の方向と関係?
- 競技外ならではの「見立て」:ときに本物の存在よりも優



(写真 細長い空間が選好される)

#### スライド 16

#### 呼名件

- 個別の公園に文化的に対応付けられた行動
  - 9/23公園にはダーカウ、レバンタン公園にはロー ラーブレード....
  - 必ずしも圧倒的優占とは限らないが、空間利用が「こなれている」
  - 柵を利用する、周回する、常に占有されている……
  - 制度的に追認される場合も
    - レバンタン公園でのダーカウ禁止(守られず)



(写真 ダーカウ禁止の掲示: 公園ごとに特定の競技が優先される)

#### スライド 17

#### 占有感覚

- 特定目的の空間として捉えず、臨機応変に利用方 法を転換する傾向
  - 必ずしも「独創的」ではないことに注意
- 植木鉢の配置→私的空間に
- 歩道→車道 歩道→駐輪場
- 歩道→飲食店の延長 歩道→ダーカウする所

#### スライド 18

#### 舞台裏感覚

- プロセスの隠蔽が志向されない傾向。
  - ・ゴミ処理
  - イベントのリハーサル
  - エアロビクス
  - スケートボーダー
    - 「失敗を見られてもいい」

#### スライド 19

運動の中のダーカウ:目的と役割

- スポーツ一般: 楽しみ主眼=健康主眼
- ダーカウ: 楽しみ主眼>健康主眼
- 運動しない人も多い、ダーカウはストリートダンスに次いで次点
- 23人中5人が学校の授業でダーカウを経験

#### スライド 22

#### 展望

- 公園ダーカウの基礎的なデータは取れた。それをどのように理論的に位置づけていくか?
- 社会感覚が空間と相互作用する一例として一般化
- 運動の普及条件:日本との比較
- ダーカウ関連・ベトナムのストリートスポーツの既存情報源について、容易にアクセスできるようにまとめたい。歴史を中心に未着手の論文も。
- 今回の調査でお世話になったコネクションを活かす形で、ダーカウを通じて日越交流を維持していく方途を模索中.....。

#### スライド 20

#### 中部ベトナムでのインタビューから

- 1990年代を境に、プラスチック製のカウが普及。
- それより前は、販売こそされていたものの、安 さ・手軽さを求めて自作することが多かった。
  - 鶏の尾、カモの羽根などを利用。鶏のとさかを利用 すると美しく仕上がる。
  - バネはコイン (というより、ルーツとしては錘目的か)。
  - 自転車からゴムを盗んできて挟み込む、服を破って 錘部分を包んで固定するなどのバリエーションが あった。
- 60年代に少年時代を過ごした人も同様に制作。

#### スライド 23

#### 所感・反省点

- 計画段階の甘さ:計画を調査項目まで具体化できないまま渡航、そこに時間を使ったためデータの 絶対量が減った。
- 社会調査そのものは経験があったが、2名で分担 すると、視点の違いや方法の違いが現れて面白い。
  - 「仮説検証型」と「発見型」
- 同じものを見ていても結論が逆のことも:結論先取 思考の怖さ
- アンケートの扱いの難しさ:綺麗な結果は出ない
- ベトナム最高

#### スライド 21

#### Tia Chop & Da Cau Kieng

- Tia Chop:カウダーブランドでもあり、南部各地で活動するダーカウ・キエン団体の名称でもある。
- 公園ごとに支部を持つ。公園で技術の高い人達は この団体に所属している可能性。
- 代表はテレビ出演も頻繁にあり、ダーカウの普及 におけるキーパーソン。
- 日本へも輸出(旭川・帯広)。

#### スライド 24

#### 謝辞

本研究にあたっては以下の方々に大変お世話になりました。 この場を借りて御礼申し上げます。

- 加納遥香様 (一橋大学大学院社会学研究科)
- グエン・レ様 (京都大学大学院アジアアフリカ地域研究研究科)
- ミン・ラー様 (Tia Chop・ホーチミンダーカウキエン会)
- ゴック・アイン様 (Vietnam-Japan Students Conference)

また、調査液航にあたり風間計博先生・金子守恵先生には手 厚いご助言を頂きました。

本研究は2015年度京都大学総合人間学部学際教育研究部学生研究プロジェクト「はかる」として実施されました。佐野宏先生はじめ、この未知数の研究プロジェクトを海外に送り出して下さった委員のみなさまに感謝申し上げます。

特集 総人・人環学生研究プロジェクト 2015「はかる」 研究課題 1 流行を企図(はか)る—ベトナムの国民的スポーツ「ダーカウ」の実践的研究

### 空飛ぶ羽根から繋がる身体

中 大樹 (文化環境学系 4 回生)



いまでもベトナムでの 日々を思い出すと胸が熱 くなる。暖かい気候と 人々、安くておいしい食 べ物、安宿のベッドで辞 書片手に煩悶した、永遠 に終わらないかと思われ

た質問票の翻訳作業……。

列をなして粉塵を吐き出すバイクを掻き分け、やっとレライ通りを横断しきると "9月23日公園"。3週間欠かさず通った、最もダーカウが盛んな公園の一つだ。サイゴンの公園は夜8時からがピークタイム。オレンジ色の街灯の下、老若男女が思い思いに遊び、踊り、飲み食いしているのを眺めるにつけ、この都市を取り巻く陽気さ前向きさは、公共空間利用と運動という、私たちの研究テーマと密接に関わっていると直感が告げる。空気としか表現しようがない何かを分析にのせ、「美しきサイゴン!おおサイゴン、おおサイゴン!(Sài Gòn đẹp lắm, Sài Gòn ơi, Sài Gòn ơi!:流行歌)」の魂を読み解くことが目標となった。

先達のいない海外でのフィールドワークは初めてだったが、一から人間関係を切り拓いていく楽しみがあった。付け焼き刃の現地語では会話が成立しなかったことも多いが、それだけに得られたデータには愛着がある。長期滞在することで土地のリズムが身体に染みわたり、より言語化しにくい感覚に肉薄できたとも思う。その分、初週のカ

ルチャーショックが深かったのも事実で、成果を 出さなければというプレッシャーと重なり、ほと んど引きこもり状態になっていたのも今となって はいい思い出である。

研究対象が公園の遊びとは現地人もびっくりの ノーテンキなテーマだが、視点を持って一歩踏み 込むことが発見へ導いてくれる。人のつながりを 通じて、思いもよらぬ方向へと調査が展開してい くことがしばしばあった。さながらピンボールの ように、翻弄されながらも少しずつチャンスをも のにできた瞬間が、調査の中で最も大きな喜びに なる。予定していなかったある家族への訪問から、 50年前のダーカウの様子について聞けたとき。調 査終盤で存在を知りダメ元で連絡を取った団体の 会長が、実はサイゴンのダーカウ・シーンをリー ドするチームと、カウ工場を運営するキーパーソ ンであったとき……。

もちろん、思うように成果が上がらなかった部 分もあるが、日・英語圏では断片的な情報しかな かった対象について、南北の遊び方の違いや他の スポーツとの関係など、新しい知識を追加するこ とが出来た。加えて、文献調査段階で読み漁った各 分野の論文を踏まえ、分析に向けた新たな視点を 検討している。話題性のあるプロジェクトを使っ て行ったおかげで、報告会以外にも何度も報告す る機会を頂いた。その度に、集めてきた抱えきれ ないほどの生データを違った関心から見直し、意 見をいただき、新たな発見があるのが楽しい。公 共空間の性質について、従来の見方では、公的な 論理と私的な論理の争いの場として捉えられるこ とが多いが、それだけでは空間の占有を取り巻 く条件を記述できない。最近は、文化的な2種類 の目線—空間の形状を察知し用途を直感する目線 と、行動に対し評価を下す他者の目線。これらの 間で、公共空間で演じる行為において、準備なく 偶発的に居合わせた匿名の「一般人」であるかの ように振る舞うことが特別な意味を持つという仮 説を、データと引き比べている。

もう一つ、このプロジェクトだからこそできた 経験というのは、共同調査者岡田とのシナジー効果だ。私は行動量は多いが、無計画に出かけ発見頼みの調査をする傾向があるため、仮説から逆算して必要最低限の調査計画を見通す能力のある岡田がいなければ、成果はとっ散らかったものになっていただろう。加えて、成果をまとめる段階では、同じものを見ていたはずなのに考察が真逆という時もあり、結論先取的な思考の根深い危険性を痛感することもあった。卒論などの調査は基本的に単独だから、こういう気づきはグループ研究でなければできない貴重な瞬間だった。

突拍子もない計画に乗っかり、鋭い指摘を下さったアドバイザーの先輩方、プロジェクト初の海外渡航を送り出して頂いた佐野先生と学際教育研究部の先生方、多岐にわたる助言を頂いた風間先生・金子先生、再三の予定変更に対応して頂いた人環総務の山口様をはじめ、多くのご支援の下に無事調査を終えることができた。改めてこの場を借りて感謝申し上げます。

こういった経緯を経て得られた成果は、当初小論文にする予定だったが、今後ダーカウに挑戦したくなった方々、またベトナムの公共空間という魅力的な対象をフィールドに選ぶ方々のためには、むしろウェブサイトとして公開するほうが利用性が高いと判断した。http://dacau.jimdo.com/

がそれだが、私自身が帰国直後から就活などで時間が取れず、やっと報告会で伝えた基礎的な情報を文章化している段階だ。歩測した主要な公園の地図とある時間帯の全来訪者の記録など、詳しすぎてまったく手を付けていないデータも多い。なんとかまとめ終わる頃にはベトナム語も上達させ、第二回ダーカウツアーに行きたいものだ。幸運にも、現地で協力してくれた方々とも繋がりを保ち、また日本国内のベトナム人ともダーカウを軸として新たなコンタクトを得られた。

海外に行く意味の一つは、いつもの自分をとり まく環境、規範、言説が決して所与の条件などで はないということ、端的に言えば生き方は他にも あるということを確認することだろう。日本では なんとなくお行儀よく使うことになっている都市 中心部の公園が、文脈が変わればこんなに明るく 陽気な、それも夜に、交流の場となり、あなたも そこでは場所の魅力の片棒を担げる、というのが 一例だ。それを知ったところで、確かに帰国後の 自分が劇的に自由になれるわけではない。それで も、フィールドワークがやめられないのは、希望 のかけらを持って帰ってきたという感覚があるか らに違いない。それは成果としての情報や分析も さることながら、それらを可能にした多くの人と の繋がり、身体で習得した現地の振る舞いの作法。 そして四苦八苦しながらその全てを積み上げた自 分への、小さな自信でできている。

(しん ひろき)

特集 総人・人環学生研究プロジェクト 2015「はかる」 研究課題 2 「総合人間学」はいかに活きうるのか

### 研究概要(申請書より)

研究代表者:吉川 将平(人間科学系 4 回生)研究期間:平成 27 年 7 月 1 日~平成 28 年 3 月 31 日研究組織:

- ·藤井富秀(人間科学系 4 回生)
- ・澤田晃平(人間科学系4回生)

アドバイザー

百木 漠(日本学術振興会特別研究員)

#### 研究目的

1) なぜこの研究を思いついたのか、研究のめざす目的

I 動機・きっかけ

まず、総合人間学部の卒業生の進路は多岐にわたり、一概に「このようなキャリアルートがある」と学部生に対して示すことが困難である。実際に、現時点では資料として進学先又は就職先別の人数データを参照することができるが、「なぜそのような進路を選択したのか」、「その分野でどのように活躍されているのか」、といった質的なものについては、それに基づいて我々学部生自身の関心が卒業生の関心や実情と重なるのかどうかを確かめられるような資料が無い。それゆえ学部生には進路選択において参考にできる選択肢・可能性が見えにくいという現状がある。本プロジェクトは、そのような問題関心によって企画されるものである。

#### Ⅱ 目的

①教育目的の成果を「測る」

総合人間学部の卒業生は、主専攻の履修だけでなく、副専攻の履修や、幅広い分野の学部科目を履修することにより、広い視野と柔軟な思考力を備えていて、総合的な判断力を身につけているものと期待されています。また、卒業生は、文系から理系に到る幅広い職種に就職して、その社会的期待に応え、のびやかな個性と独創性を高く評価されており、国家機関、地方自治体、民間企業等での活躍の道が大きく開かれています。

(総合人間学部 HP「学部案内」より)

学士課程卒業にあっては、以下の点に到達している ことを目安とする。

- 1. 学系を異にする主専攻分野と副専攻分野における学識を身につけ、新たなる「人間の学」に関する幅広い理解力を持つ。
- 2. 人間を、社会環境、自然環境を視野に入れた文理融合の立場から理解することができる。
- 3. 人間や社会の現実問題を直視し、その解決に積極的に挑戦する創造的な問題解決能力を有する。
- 4. 自分自身の見解を明解に主張しつつ、他者の意見にも十分耳を傾ける柔軟なコミュニケーション能力、 リーダーシップ能力を有する。

(総合人間学部の学位授与の方針、ディプロマ・ポリシーより)

このように総合人間学部は幅広い活躍を卒業生に期待している。こうした到達目標を念頭に置いた上で、それが具体的にどのような形で達成されうるのか調査・確認する。結果、総合人間学部が卒業生に期待する活躍の実際例を伺うことができれば、これを資料として集積することで学部教育の成果として提示することもできる。本プロジェクトは基本的にこうした結果を期待して行うものとする。

#### ②ロールモデルの提示

現時点での問題関心として、学部生にとって、卒業生の進路が多岐にわたり、自分自身が進むことができる選択肢、可能性を参照することが難しいという実態があることを I. 動機 にて述べた。

こうした課題に対して、卒業生がどのように活躍しているのか情報を得ることで、学部生も自分自身が可能性としてどのように活躍しうるか、自分自身の関心と照らし合わせて参考にできるようなロールモデルを共有することで取り組む。

#### 2) アピールしたい点

本プロジェクトの研究内容は学術的な研究ではないが、その動機は OB・OG の活躍を追うことを通じて「総合人間学部とは何か」を追求する探求心に他ならない。

本プロジェクトの研究員はこのプロジェクトが動き 始めた頃には就職活動を終えているだろうが、一昨 年時より学部の研究室を訪問することを通じて「総 合人間学部とは何か」を追い続けてきた研究員メン バーである。

そうしたアカデミック分野でのインタビュー経験に加え、実業分野についても本年度の就職活動経験が活かせるタイミングであり、昨年度の「研究プロジェクト」の結果である「ポータルサイト」を学部生のための情報集積の場として活かす機会でもある。すなわち本年度は研究員がインタビュー及び「OB訪問」の経験を卒業前に活かすことのできる最後のタイミングであり、できたばかりの「ポータルサイト」を活かす上でも本年度だからこそ進めることのできるプロジェクトだと考える。

そのような今年限りの機会として、学部時代に積んできた経験を活かし、いわば「卒業制作」として形に残すことができればと望んでいる。

#### 研究の具体的な進め方

Ι

本プロジェクトはインタビューによる質的調査が主となるため、進め方としてはインタビュー方法に関する文献調査を行った後、卒業生の調査・アポイントメント及び資料掲載許可のお願いとインタビュー取材を同時並行で進めていく。その狙いとしては以下の通りである。

①インタビューイーである卒業生の方のご紹介で、他の卒業生を紹介していただける可能性があるため、アポイントメント期間と取材期間を分けずに活動する方が進めやすい。

②ある程度の調査結果を蓄積する資料の型を用意 しておかないと、調査の開始時に集めた資料と開き が生じて、資料の蓄積としてノイズが多いものとなっ てしまう。

#### Ⅱ 取材の同行人数について

可能な限り多くの研究員で望む。理由としては、学部生それぞれの視点によって生まれる質問が異なる

ため、不特定多数の学部生にとって進路上の参考資料となりうることを考えると、インタビュアー 1 人の関心に偏ってしまうことを避けるためである。それにより交通費が経費の分を越えた場合は研究員の自費で賄う。

#### Ⅲ 資料の公開・発信の方法について

常にWeb上で公開するものとする。サイトの運営は研究員によって行う。HPを開設する他、既に昨年の研究プロジェクトの成果である「ポータルサイト」への掲載を行う予定である。狙いとしては、学部生の参考資料となりうることを考慮し、より多くの学部生に関心を持ってもらう目的で、論集としてプロジェクト終了時に発表する他に動きを見せることで、広報面で効果があると考える。

#### № 卒業生の調査について

本プロジェクトの発足後に OB 会の協力をお願い することにしている。既に OB 会運営委員でおられる 安部先生から取次ぎの許可をいただいている。

▼ 研究員の現在定めるところの役割を以下のものとする。

(吉川)

- ・本プロジェクトの企画・運営 研究方法に関する協議会の開催
- ・卒業生へのアポイントメント及び取材全般 (藤井)
- ・広報・IT 取材記事のポータルサイトへの掲載・蓄積
- (余力があれば、アカデミック分野または教育分野で 活躍される卒業生へのアポイントメント及び取材 全般も行いうる)

(澤田)

・実業分野において活躍される卒業生へのアポイン トメント及び取材全般

※これら研究方法及び役割分担は現時点で明確に 定めるものではなく、研究方針と共に研究員との協議 にて変更することがありうる。ただし、本プロジェクト の研究目的は変わるところのないものとする。

#### Ⅵ 経費の使用について

原則、取材のための交通費に用いるものとする。 その他、文献調査のために用いることもありうる。 特集 総人・人環学生研究プロジェクト 2015「はかる」 研究課題 2 「総合人間学」はいかに活きうるのか

### 学部卒業生インタビューにみる学問的経験の「実用性」

(インタビュー掲載:木南陽介さん(平成 10 年卒)/小野邦彦さん(平成 19 年卒) 渡辺雅之さん(平成 9 年卒)/井坂信彦さん(平成 9 年卒))

吉川 将平 (平成 28年人間科学系卒)



この企画は、アカデミックへ進まない学部生が学問を学ぶことの意義を、卒業生の方々の実体験を通じて示したい、という希望を発端としたものでした。総合人間学部で学ぶことの多くは「実学」と距離を

取っていながら、学問を通じて社会や人間を見る 観点や「ものの考え方」を養うことができる(そ んな平易な言葉で表せるほど薄っぺらいものでは ないのでしょうが)と感じていたのですが、学部 の外には中々そうしたことは伝わりにくく、「自 分が価値があると思うことを知らしめたい」とい う想いを募らせていました。元々は学問的な研究 テーマをやってみたかったのですが、教養学部的 な勉学が「役に立つ」ことを示したい思いが強く、 一方で「学問で得たことはアカデミック外で活き るのか」などという問いが学問的研究テーマとな りうるのか、またそれを「実証」しようという姿 勢が誠実なものなのか自信が無かったため、卒業 生の方々に在学当時を振り返ってもらい、学問的 経験を通じて得たもの、見えたものの価値を探ろ うと、「卒業生へのインタビュー調査」と銘打って 企画としたのでした。

このような貴重な機会を頂いたことに、本企画 関係者の方々、本部の事務の方々、インタビュー を快諾してくださった先輩方に心より感謝申し上 げます。またタイミングが良ければ、こちらの企 画実施期間にイギリスにおられた人間・環境学研 究科の戸田先生のお話も伺いたかったと悔いてお ります。ご帰国後、成果発表会にてお考えを伺え なかったのは非常に残念です。

インタビュー自体は、伝手が無い中で始まったこともあり、既に民間メディアでインタビューを受けられていた卒業生の方にアポイントを試み、計4名の方にインタビューの機会を頂きました。メディアに露出されている卒業生の方々ということもあり、結果的に実業家や政治家の方が中心となり、うち3名の方は総合人間学部が創立した年に入学された、総人一期生の方々でした。

企画を通じての率直な感想なのですが、一番驚いたのは、インタビューさせて頂いた先輩方が皆様方、学部時代に受けた中で面白かった講義や影響を受けた先生のことを覚えていらっしゃったことです。冒頭に書いた私個人の関心事から、インタビューでは決まって「総人で面白かった講義や、また今のお考えに影響した点はどのようなものですか?」と質問していたのですが、まるであらかじめ準備されていたかのように、咄嗟に幾つも当時受けられていた講義や先生方のことを、昨日のことのように語りだされたことには大変な衝撃を受けました。中には20年以上も前に卒業された方もおられる中、目の前で活き活きと語りだされる

学部の「想い出話」に聞き入ってしまいました。

同時に、学部で学ばれたことが、直接的にでは ないにしろ、お仕事で活かされている、また職業 観、価値観に影響されている、という実感を全員 の方から伺えたことは、大変な貴重な「成果」だっ たと思っています。私自身、教養に富んだ先生方 や講義に溢れているこの学部が大好きで、ここで 学び得ることは生きる上でも大変重要になると信 じていましたし、社会に出る前に自分自身の問題 関心を深めておくこと、学問を通じて見える一種 の「常識」を形成することを目的として学業に励 んでいた身としては、大変嬉しく感じました。ア カデミック外の世界において、学問的経験に価値 があることを「実証」はできなくとも、自分がそ の時学んでいたことや、教えを頂いている先生の 言葉の価値を、いつかまた実感するときが来るの だと確信できたところでもありました。

今回インタビューさせて頂いた先輩方は、どなたも在学当初から強い感受性や問題意識を持たれており、そうしたご自身の心の声に従って意識的に過ごされた学部時代の中で問題意識を深められたことが、各々のご活躍へと通じていたのだ、と私は受け止めています。こうした先輩方を輩出していること、自身の問題関心や価値観に向き合い、素直に持ち続けられる贅沢な環境を、卒業生の一人となった私も誇りに感じております。同時に自分の好奇心や問題関心を率直に持ち続けたまま過ごせる時間は非常に貴重だと思います。

僭越ながら私自身の学部生活を思い返してみても、知りたいと思ったことを思う存分に調べたり、授業後に先生を捕まえたり図書館の本を借り漁ったり、自分がやろうと思えば満足のいくまでやれる環境があった上、今回のように学部の企画に関与させて頂くなど、扉をたたけば幾らでも学ぶ機会があり、非常に恵まれていたなと感じています。4年間では勿体無かった、あるいは同じ4年間で

ももっと自分の問題関心を大切にしていれば、より密な時間が過ごせたとも思っています。後輩にあたる皆さんには、卒業して「もっとこうしておけばよかった・・・」と思う前に、本当の意味で自分を大切に、今の時間を贅沢に使ってほしいな、と思います。

この企画には、当時の自分たちを含め、学部生の進路の参考にもなればという目的があります。インタビューにご協力頂いた先輩方からも総合人間学部の後輩に向けてメッセージを頂いております。末尾のインタビュー記事をご覧ください。学部を卒業された先輩方の声として、ご参照頂けますと幸いです。

(きっかわ しょうへい)

#### 木南陽介さん

株式会社レノバ代表取締役社長。

1993年に総合人間学部に入学した総人1期生。3回生で1年間の休学をし、同級生らとIT企業を設立。1998年卒業。マッキンゼー・アンド・カンパニーに就職したのち、環境問題への関心からリサイクルワン(旧社名)を創業。現在、株式会社レノバ代表取締役社長。再生可能エネルギーの事業開発に取り組まれている。

#### 環境への関心と共に過ごした学生生活から起業へ

吉川:リサイクルワン創業のきっかけになった環境問題への関心はいつからですか?それは総合人間学部に入ることとどう関係しますか?

木南さん:それは明確で、環境問題への関心は総人に入る前から持っていました。僕は神戸に生まれ育っていて、六甲山で遊んで暮らしていたんです。だからそもそも自然が好きで。しかし、当時80年代の神戸はとても開発が進んでいて、山を崩して海を埋め立てて、赤潮が発生して・・・という状態でした。ですから、環境問題がこれから大事だという感覚は中高から持っていたものです。

総人に行ったのは、ある新聞記事を見たからです。京都大学が学際的な研究をするために総合人間学部を創設するという記事が載っていて、そこには『経済学や工学などの専門分野だけで社会問題を解決することは困難なので、それを克服するために、例えば、"環境問題のような"問題解決を主軸として様々な学問を集め、複合・多分野的なアプローチを試みることが大事だと考える。』といった趣旨のことが書かれていました。そこに関心を持って受験して、入ったという流れです。

澤田: すると、学生生活も環境問題を意識して送られてきたのですか?

木南さん: そうですね。環境について、図書館で本を読む等、色々な探究をしていて、講座では環境科学を専攻したりしました。印象に残っているのは、オムニバス講義で法律や化学、経済学など様々な方面から環境問題へのアプローチを学んだことですね。また当時の経営企画のアルバイトの経験がきっかけで、環境問題の解決は経済的に自立できる存在としてやるべきだと思い、民間事業者としてやろうと大学3回生の頃に思ったんですよ。そのアルバイトは総人の同じクラスの友人に誘われて始め、夜遅くまでインターネットプロバイダー会社の経営企画をしていました。事業を立案するとか、投資をしてリターンを取るとか、サービス

を提供して実態として社会を変えているわけですよね。『ああ、こういうのやっていいんだ、世の中自由だ。』と思い、それと元々持っていた関心が一緒になって、<u>環境分野で事業を起こすことに意味を感じ、とてもおもしろそう、もっと言えば自分自身が人生を懸けるに足る命題だ</u>と思って、いずれこの分野で起業しようという動機にたどり着いたんですよね。

ただ、経営となるとやはり企業戦略が要ります。その時たまたま大学時代に会社を一緒にやっていた友人がマッキンゼーに行っていて、インターンに誘われて行ってみたら面白くて、『経営とか戦略とか、どんなことが企業の中で起こっているのか、知ってみたい』といった気持ちが強くなって、それでマッキンゼーに入社しました。その時点では、その後起業の準備として、ヨーロッパの環境系の大学院に行くとか、向こうの起業の視察をするために3年くらい行くとか思っていたんですよね。結果としては、2年でコンサルタントを辞めて準備期間もなく会社を創ったんですが。

澤田: 学生時代に起業された際、どうやってメンバーを集められたのですか?

木南さん:「そう、システム開発の仕事なんですけど、まさに総人的なんですよね。僕とさっき言った彼は文系だったし経営の方だったんですよ。他に2人、プログラミングとかができる総人の理系クラスのメンバーがいました。5人でやっていたうち4人が総人。<u>色んな人種が雑多にいる状態があったので、友人同士のつながりだけで会社がつくれた</u>という背景がありましたね。

吉川:独立されたタイミングについて、チャンスと計画がどのように噛み合ったのですか?

木南さん:リサイクル法の成立が重要な契機でした。2000年の5月にリサイクル法が施行され、複数の法律が成立するのは新聞を読めばわかることだったので、「あ、マーケットができるんだな」って思っていましたよ。そして、当時の会社でのコンサルタントの仕事に余裕が生まれ、夜中1時まで業務に忙殺されていたのが夜10時くらいで終わるようになってから、夜中の時間を環境分野の学習に使うようになりました。普段の仕事外で自主学習的に進めていたのですが、いつしか独立してやっていける程度の事業計画になっていました。

#### 在学当時の感想:大学に対して感じていたこと

木南さん:(在学) 当時の感想としては、<u>総人は学生に対して酷だな</u>と思っていたんですよ。私は現実問題を直視する

ことが大事だと考えていますから、学問もプラグマティックに 捉えています。現実的な問題の解決が先にあっての研究 だという意識が強く、総人で学ぶことがそことはほど遠いと 感じていました。総人は旧教養部とあって、高度な、アカ デミック的学問というか、実学の手前のものなので、教授 方に現実問題解決への課題を負わせるのは無理がありま す。すると学生が自分でそのような学問と現実の問題とい う非常に離れたものを繋ぐ必要がでてしまう。これはかなり 難しい。理科系的というか、実学的なものの考え方かもし れませんが、学部の教育目標に"創造的な問題解決能力 を有する人間を育てる"と謳うなら、学生任せにせずに大 学が意識して取り組むべきだと思います。

澤田: 先生方から企画への要望で、大学へのフィードバックをいただきたいと思っていたんです。

木南さん:先鋭化された学問でないのは学問ではないというスタンスは京大の伝統としてあって良いのですが、先鋭化した先に何の現実問題があるのか、先生方がもっと学生にしっかりメッセージを伝えていただきたいですね。放っているだけではなくて、学生が目的意識をちゃんと持つように大学が力を入れるべきだと思います。それが自由な発想を制限することでもなんでもないので。

吉川:その話の延長なのですが、木南さんは大学はどうあるべきだと思われますか?

木南さん:もっと交流的であるべきでしょうね。基本的には 知的な探求というのは探究心そのものなので、<u>本来は追求</u> すると大学の枠をはみ出していくものだと思います。大学は 狭く閉じがちなところがあって、それでは結果としてある種 の成果に繋がらないでしょうね。

例えばある私立大学のように OB を大学に呼んで交流するようなこととか。偉い方の話を聞くのが大事なのではなくて、<u>若手の方と交流して、学生が 5 年後、10 年後の自分が想像できることようにする</u>ことです。そこで大事なのがお題をしっかり立てることです。研究の題目でも懇話会のテーマでもいいので。京大の人はただ集まるということには意義を見出さず、自分の関心領域がないと動かないのだから、そこか関心にぶつかるようにお題をちゃんと立てるべきだと思うんです。学部がもっとイニシアティブをとっていいと思います。

#### 後輩へのアドバイス:問題解決とリーダーシップ

吉川:では最後に、後輩である学生に対してアドバイスを 是非お願いします。 木南さん:1つは新機軸を持ってほしいという事ですね。過去に無い何かを出してほしい。学問分野でも人間の知的好奇心が広がっていく中で更にその先を探求していくので、過去の学習はもちろん大切。でもそれだけではダメで+α何か生まないと良くないですよね。もう1つは現実を直視すること。どんな学問領域であれ、現実との接点を持ってほしい。起業しろとまでは言いませんが、現実を直視して、現実問題に対して問題意識を持ち、具体的な解決に貢献する、具体的に成果を出すという目線は持っておくべきだと思いますよ。

澤田:問題解決を目指す組織のリーダーとして、リーダー に必要なことは何だと考えますか?

木南さん:大事なのは0から1をつくる事だと考えています。例えば、みんなが言わない事でも自分が言い出すこと、0から1の発言をすることですね。ただし、言うだけではダメです。0から1を発信すること、つまり問題に気がつくことに加え、その解決に向かって周りを引っ張り、それを継続することが必要です。『言い出す』・『引っ張る』・『続ける』これらの要素が現実問題を解決するリーダーに必須だと考えています。

『言い出す』時、言葉で発信すれば誤解も生むし、強い流れを作れば逆の反作用も生まれます。しかしそれらの反作用があっても決断をしなきゃならないことがあります。『引っ張る』段階では先の絵をイメージに落としたビジョンをいかに言語化して伝えられるかが大事です。良い伝え方をすると人の行動は変えられますから、それで社会が変わるところまでいって初めてリーダーシップの発露だと考えています。『続ける』のに必要なのは自分自身の強い問題意識ですね。この会社でも環境問題への関心の持ち方は社員一人一人違うし、正直薄い人もいる。その中で「なぜこの仕事をするのか。」という問いに対して自分の中に答えがないとダメです。そうした根幹の部分に強い自信がないとリーダーシップの発揮には繋がらないと思います。相手が何人だろうと、その中で自分が一番この問題に関心を持っているんだという自信があることが必須の条件です。



#### 小野邦彦さん

1983 年奈良県生まれ。文化人類学(菅原ゼミ)を 専攻。学外では着物屋のビジネスを手伝い、1年間 休学をしてバックパッカーを経験。2007年に卒業後、 新卒で外資系投資銀行に就職。修業期間として2年 働いたのち、独立。2009年より株式会社坂ノ途中を 設立、代表取締役をつとめる。

#### 総人入学と文化人類学との出会い

吉川:まず、小野さんはどうして京大の総合人間学部に入ろうと思われたのですか?

小野さん:それは大学進学の動機から来ていて、端的に言えばやりたいことを入学後に決められるからです。僕は四人兄弟の末っ子で、親や兄姉に大学進学者はいません。兄や姉は皆高校時代アルバイトに明け暮れていました。僕もそれが普通だと思っていたので高校生の時は沢山アルバイトをしていたのですが、そこで出会った大人たちがすごく嫌そうに働いていたんです。先に社会人になっていた兄や姉も同様でした。彼らを見ていて社会には出たくないと思いました。

一方高校では、同級生たち皆が大学進学を前提視していました。『そうか、大学に行けば社会に出るのを遅らせられるのか!』とその時気づいたのが、大学進学を決めた動機です。そんな理由なので、当初は大学で学びたいことは何一つなく、やりたいことが決まっていなくてもよさそうな総合人間学部を選んだというわけです。

吉川:会社のホームページを拝見しましたが、小野さんの 尊敬する人に退官された今も有名な菅原先生の名前があ りました。先生のどんな点を尊敬されているんですか?

小野さん: 先生は凄く苦悶しているんですよ。頭がいいのに煩悩も多くて(笑)。会うとわかるんだけど、眉間に深いシワが刻まれているのがとても印象的です。彼ほど明晰な頭脳を持っていても悩みは尽きぬのだから、我々凡夫たちが悩みの多い人生を送るのも当たり前だ思えたんです。

僕が彼を好きな理由は、凄く賢いのに上滑りした議論を 毛嫌いするところですね。メルロ=ポンティが言うところの 『上空飛行的』な思考に対する徹底的な拒絶反応がある。 あるいは、中央と周縁という構造があるでしょ、大学にいる から偉いとか、周りの人を啓蒙してあげなきゃとか。そうい うことへの嫌悪感がもとても強い。その辺のメンタリティが 僕は彼に似ていて、共感しています。彼はあんなに賢いの に、ボツワナのカラハリ・ブッシュマン(※南アフリカのカラ ハリ砂漠に住む狩猟採集民族。菅原先生は彼らの元で長 年フィールドワークをしている)との生活をとても活き活きと話し、多くの時間やエネルギーを投じてそれを描写します。 現場感を大事にするし、地に足が着いた思考とか論述をする人なんです。自分もかくありたいと思いますね。

吉川:菅原先生から学んだことで、今も生かされていることなどありますか?

小野さん: 先生のような、<u>地に足のついた思考や行動様</u> 式はビジネスでもとても大切。彼は人類学の主要な方法であるフィールドワークの要諦として『伝聞情報ではなく第一情報に当たれ』『アテが外れてもそこから得られるものを探せ』を挙げているんですが、これらはビジネスの現場にも共通しています。元々学部の頃から彼のことが好きだったんですけど、今自分が会社を経営するようになって若手社員に諭す内容が菅原先生の言っていたようなことだったりして、改めて菅原さんと出会えてよかったと思っています。

僕は学問には2つあると常々言っています。1つは人類学、もう1つはそれ以外の学問。とても独善的な分類ですが(笑)。人類学以外の学問は中央から周縁を見ようとするんだけれど、人類学は周縁に立脚点を獲得し、周縁の目線から周辺の物語を語ろうとする。中央から偉そうに抽象的な理屈をこねるんじゃなくて、ちゃんと現場で物事を考えよう、という学問のスタンスが要は気に入っているんです。

吉川:小野さんは学外の活動でも沢山のストーリーをもっていらっしゃると思います。いまのご自身の価値観に大きく影響したものを特に挙げるとしたら何でしょうか?

小野さん:1つはまさしく今の話で、反権力、反体制というか、もともとそういうキャラなんですけれど、人類学をするうちに補強されたというか、より実践的になったというのは言えるかもしれないですね。それから、3回生の時に友人が立ち上げたアンティークの着物屋で働いたのですが、これが楽しかったんですよ。それまで、自分の時間を切り売りするしょうもないものと捉えていた仕事が、自分の伝えたいことを伝える手段になりうるものだ、つまりは働き方によるんだとこの時学びました。

また、バックパッカーをやっていたのは大きな財産です。いろいろな地域を旅する中で、妙な虚飾とか見栄みたいなものに捕らわれて生きることの不毛さを感じました。『<u>本当に意味のあることをして生きよう。それが多くの人が理解しなくても構わない</u>』と考えるようになったんです。でも、そういう感覚ってずっと昔から持っていたように思います。京大にいた5年間は、今まで話してきた経験を通してそれが形になって見えてきた期間と言えると思います。

#### 外資系投資銀行での修業

吉川:独立を決めて修業の場として外資系投資銀行に行

かれたとのことですが、実際に働かれてみて得たビジネス 経験はどうでしたか?

小野さん: 学生時代の終わりごろには数年後には環境負荷の小さい農業を広げるような事業をしようと決めていたので、起業に必要な資金が稼げてビジネス経験を積める、めちゃくちゃに働くところとして外資系の金融機関を就職先に決めました。

短期間でできるだけ経験を積むべく、会社では『僕、心が死んでいるので』と宣言して、若手の中でも僕に無茶な仕事が集中するようにしていました。その結果、深夜も仕事をどんどんもらえるようになり、めちゃくちゃに働くという意味ではいい環境だったと思います。

アテが大きく外れたのはスキルの面です。ひとつめは、財務の知識。僕がやっていたのはデリバティブを活用した金融商品開発という、膨大な金融分野の中でもとても複雑な領域で、小さい会社の経営での経理・会計などといったいわゆる一般的な財務とは仕事の中身が全く異なるんです。専門性が高すぎる金融的な知識は起業するときには殆ど役に立ちませんでした。もうひとつのスキルは英語です。大学の授業でchildを"チルド"と読み同級生の間で伝説になるほど英語に苦手意識を持っていたのですが、外資系の企業に行けば克服できると思っていました。入ってみると金融工学は専門的になればなるほど数式で会話するようなものになって、多少ぎこちない英語でも伝わってしまうんですよね。しかも、ニュアンスが大事な所などは周りの帰国子女の人が助けてくれたので、結局英語は上達しなかったんです。

その一方でとてもよかったなと思うのは、もっと根本的な、 仕事をしていく上でのスタンスを確立することができたこと です。一言で言えば「逃げない姿勢」。働きだして2年目、 リーマンショックが起きました。自分が計算した数字が翌日 新聞に載ったり、10分後の記者会見のためにリアルタイム で顧客の損失額を計算したり、とてつもない量のオーストラリアドル売りの指示を出したりととても緊張感のある毎日で、まさしく荒行でした。それが一通り片付いた後、今までの自分とは違った、視座が一段上がった新しい自分がいることに気付いたんです。そのとき、会社を辞めて起業してもなんとかなるんじゃないかと思いました。

#### 農業分野での独立の経緯と決断

吉川:もともと環境の分野で起業を目指されていたとの事ですが、中でも農業の領域でやっていこうとは考えられたのはいつごろからなのですか?

小野さん:農業という分野には学生時代から注目していました。バックパッカーとして世界を旅し、自然環境と人の関係を見つめなおす中で、農業がその結び目であると感じていたんです。それで、『農業×環境』で意味のあることをしようと考えました。

具体的には、環境負荷の小さな農法で育てられた、若 手農家や新規就農者の農産物を販売する事業です。彼ら /彼女らの野菜はとても丁寧につくられていてすごくおいしいんだけれど、どうしても少量不安定になりがちです。関係 者の方や農家の方をたくさん回っているうち、そういう野菜 を売っている会社は全然無いことに気付いたんです。なぜなら、量の安定しないものは扱いにくいから。それでは持続可能な農業を志す人が一歩を踏み出せないし、踏み出したとしても続けることができません。多くの人はそのことに気付いているけど、難しいからやらない。だから、たとえ少量不安定でも売る側の工夫で何とかしよう、丁寧につくられたものを丁寧に売れる仕組みをつくろうと考えました。これが、この事業を始めた理由です。そこまでの逡巡はさほど長くなく、会社を辞めた5月半ばから具体的な検討を始め、起業した7月21日には方向性はできていました。

吉川:かなり短いスパンで決定されたんですね。事業内容を詰めて、一緒に会社を立ち上げる事になったメンバーを説得されるのは大変ではなかったですか?

小野さん:そんな何か特別な事ってないですよ(笑)。大切な決断って大体 15分くらい考えれば十分じゃないですか?誘ったメンバーも次の日には元の仕事を辞めて来てくれたりとか。悩んでいる時間って非生産的で何も生まないことが多いです。その段階にかける時間は最小化して、選択肢を並べてどれが一番いいか "迷う" ほうが生産的だと思います。それだと、あまり時間のかけようがないでしょう。迷う段階までいかずに悩んで止まっている場合って、悩みながらそんな自分を可愛がっていたりするんだと思います。

吉川: 悩むことと迷うことに関して、特に総人生はたくさん 迷ったり悩んだりすると感じます。迷っている学生へ、どう 決断を下せばいいのかアドバイスをいただけませんか。

小野さん:人間というものはどうしようもなく矮小な存在です。でも同時に、自分は特別な存在でもあるんだと強く思ってください。特別だと思っていると、他の人がやらないようなことをしていても気になりませんよね。自分は特別だからこんな考え方を持っていて、他者と違う生き方になっても当然だと思うことが大切だと思います。せっかくよく分からない学部を選んだからには、ちゃんと変な生き方をしてほしいと思います。



#### 渡辺雅之さん

1999 年の DeNA の共同創業と事業の拡大を経て、2010 年に渡英し、ロンドンにて教育サービス Quipper を創業。現在、新興国を中心に 6 か国で事業展開されている。2015 年より、リクルートマーケティングパートナーズ資本下。

※渡辺さんは一人目のインタビューイー、木南さんのご 学友で、1993年総合人間学部入学、1997年に卒業。

#### 学生時代について——途上国旅行で深まった問題意識

吉川: Quipper 創業に当たっては、学生時代のご経験が バックグラウンドとして大きいと伺ったのですが、まず途上 国に関心を持たれたきっかけは何ですか?

渡辺さん:途上国や新興国は学生時代に沢山の国を回りましたが、旅行が好きな割にお金が無かったので、低予算で長期間の滞在ができる途上国へ行ったというのが理由です。だから当初は特に強い問題意識は無く、見聞を広めるために旅行するにあたり、予算や日程の都合でアフリカやアジアを回ったというところです。

吉川: そういったご旅行が今のご関心とどのように繋がっていったのですか?

渡辺さん:旅行全般を通して感じたのは、自分がどれだけ 恵まれているかということですね。僕は福島の田舎出身な のですが、片田舎であるにも関わらず学校には尊敬できる 先生もいらっしゃったし、高校まで地元の公立学校で勉強 しましたが、国が決めた教育制度で自分なりに頑張った結 果、特別にお金のかかることは何もしなくても良い大学に行 かせてもらって、こうやって世界を回ることが出来る、と。そ うではない地域や家庭が世界にいかに多いかということに 旅行していて気が付き、その時いかに自分が幸せで、そし て世の中というのは非常に不公平に出来ているな、という 想いを強くしました。

同時に当時僕はジャーナリスト志望であったため、京大 卒の本多勝一さんという方の本を読んで影響を受け、問題 意識として社会のシステムや構造がもたらす不公平に怒り を覚えていたので、できることを何かしたいなと思うようにな りました。

吉川: NPO 法人の難民キャンプに参加されたそうですが、 それは在学中のいつの時期にどういった経緯だったのです か? 渡辺さん:たまたま4回生の夏にアフリカを旅行している時に、タンザニアのガラという地域でルワンダからの難民キャンプに紛れ込んだんですよね。そこで少しの間滞在させてもらって、ちょっとしたお手伝いをさせていただく中で、もう少し難民問題を深く知りたいと思うようになりました。秋にアフリカから帰ってきて、すぐに当時キャンプを運営していたAEFというNPOの本拠地がある福岡の北九州に行って、『何か手伝わせてください』と言って寝袋を持っていってそのまま2ヶ月お手伝いしました。なので、正式な職員でもなく、プログラムに参加したわけではなく、勝手に転がり込んだという感じです。

また卒論の時期が重なっていたので、一石二鳥にしようと前に計画していたものをやめて『日本の NPO』というテーマに変え、そこでのフィールドワークを題材にしました。

#### 総合人間学部でのバックボーン

吉川:総合人間学部での学業が今のお仕事に結びついて いる点はありますか?

渡辺さん:専攻は人間関係論という、当時は社会学と教育 学と精神病理学とが合わさった専攻でした。教育学の岡田 敬司先生のゼミに活動家の方が来て、先生と言い合いをし たりとか、ご自身の手痛い失敗談を聞いたりとかして非常 に面白く、そこは教育に興味を持った動機の1つかもしれま せん。社会学も社会の構造を学問的に捉えられて面白かっ たです。当時ダブル高橋と呼ばれていた高橋三郎先生と高 橋由典先生、精神病理学の新宮先生、講義はどれも面白 かったですね。直接仕事とかキャリアに影響を受けたかど うかはわからないですけれど、少なくとも物事を見る時に社 会規範や、構造で見るようになったりとか、教育に関心を 持つようになったりとか。精神分析学については、個人個 人で色んな考え方のタイプがあって、中には器質的に、病 理的に精神を病んでしまう方がいるなど、ダイバーシティー に対する理解のようなものは授業を受けて深まったと感じ ました。当時勉強したことが、色々な意味で現在の考え方 のバックボーンになっていると思います。

吉川:総人一期生として、できたばかりの総人に入った動機は?

渡辺さん:他の学部でこれというのが無かったんですよね。 僕たちは一期生だったので情報がなく、それこそ設立の理 念だったり、どんな背景で、どんなフィロソフィーで作ったの か、というところをじっくり読むことで判断するしかなく、その 内容が、すごくいいなと思ったんですよね。

理系文系の領域がオーバーラップする部分に目を向け ていたり、リベラルアーツとしての授業を行うといった点も興 味をひかれました。理系と文系という受験上のくくりを飛越 えて、例えば理系で受験した僕がすぐ文転して人間学科を 専攻することが可能だという点も魅力的だったし。僕自身が 文理を分けることや理系学部に興味が持てなかったので、 文理に拘らない基本的な学部のスタンスに共鳴しました。 当時、設立の趣旨のようなものが発表されたときは『これ だ!!』と思いましたね。

吉川:学部時代を振り返ってみて、総人に入って良かったところや、改善点として感じてことを教えてください。

渡辺さん:総人への不満は特に無く、確かエアコンが無かったなど(暖房はあったような気がしますが)、ハードウェアでの老朽化が辛かったなと思うくらいですかね。一期生だったので色んな方面で手探りだったのは面白かったですし、何より一番良かったのは、木南を始め良い友だちに出会えたことですね。未だに付き合いがある友だちが結構いますからね。

#### ご学友、木南さんとのご関係

吉川:渡辺さんが木南さんにご紹介したという、ベンチャーでのインターンについて、どういった経緯で始められたのですか?

渡辺さん: 当時はインターンという言葉では無かったですけれど、僕も友人に紹介されて始めました。代々後釜を紹介していくルールだったんです。サークルの先輩に紹介してもらいました。本当にできたばかりの京都のベンチャーで、社員は2人だけで、アルバイトやインターンが10人くらいの規模でした。アパートの一室を借りてやっている形で、殆どかかりっきりで仕事をして、とてもじゃないですけれど、大変でした。仮眠室までありましたから。

吉川:木南さんは凄く良い経験だったとおっしゃっていました。

渡辺さん:いい経験でしたよ。当時、京都のインターネットプロバイダが凄く遅くて、それに次ぐ第二のプロバイダを立ちあげる、ということで、お金を集めて NTT と交渉して、サーバーを仕入れて、開発は『京大マイコンクラブ』の学生たちをエンジニアとして沢山集めて・・・無給でしたがやっていることは物凄く面白かったですね。エキサイティングでした。それがぐいぐい大きくなっていって、僕はその初期段階にいて、実際に大きくなっていくところは木南らが中心メンバーとしてやっていましたね。

あと、ソフトウェアの開発をしたりとか。オムロンなど京都の一流企業から受注して、学生エンジニアが開発する。

インターネット事業の勃興期で、いろいろ試して、凄く面白かったですね。僕も木南も離れてしまってから、社長の吉井さんという方は事業を売却され、もうサービスは大手に吸収されてしまいましたが、成功したベンチャーだったと思います。

#### 卒業後のキャリアについて

吉川:マッキンゼーに入社された動機は、元々独立を目指されてのことだったのですか?

渡辺さん:いや、そんなことはないですね。インターンをやったのがきっかけです。大学3年生の春に、たまたま大学の掲示板で張り紙を見つけて、なんか給与が1週間10万円とかで、東京への交通費とホテル代が出る、と書いてあって、『凄い。』と思って。同時に『何て怪しいんだ。』とも思いました(笑)。まあでも申し込んで採用されて、ちょっとした調査みたいなことをやって、それが面白かったんですね。

当時はジャーナリスト志望だったので、就職活動では朝日新聞や日経新聞などを受けたんですが、次々と落ちてしまって。マッキンゼーはインターンもしていたところから知り合いも多く、その流れで内定もくれたので、ここでいいか、と。なので、『マッキンゼーに行って新規事業を学びたい! 是非御社で!』とかいうよりは、入れてくれると言ってくれたので入社しました。当時は今みたいに凄く有名で入社が難しいような会社でも無かったんですよね。

それこそ友達とかに言っても知っている人は少なかったですし、東京だとややメジャーだったのかも知れませんけど、京都では就職情報とかそういうところに積極的な人が当時は周りにいなくて。友達に社員の数を聞かれて200人くらいだと答えたら、『渡辺は中小に行く』なんて広まったのが思い出されますね(笑)。『中小だけど頑張れよ。』とか言われました。知名度は京都では当時そんなに無かったんですよ。

吉川:元々、新規事業をやろうと思って入られたわけではなかったということでしたが、実際にマッキンゼーで出会われたご同僚の南場さんと川田さんと会社を設立された背景には、お二方の影響によるものが大きかったのでしょうか。

渡辺さん:そうですね。新規事業というか、新しいサービスを作ることには物凄く興味があって、趣味的に考えることが好きだったのはあります。あとは南場さん、川田さんと仲が良かったというのもあるし・・・割と気軽な気持ちですね。若かったし、仮に1年や2年棒にふることになっても構わないと思っていました。面白そうだから行こうかな、やろうかな、という気持ちですね。

吉川:その後、Quipperを創立されるにあたって、DeNAを 辞められたきっかけについて教えてください。

渡辺さん:そうですね、DeNA が凄く立派な会社になって、 僕自身がいなくても回るというか、会社が大きくなってきて 成長に貢献している実感が少なくなってきたというのもある し、海外に住んでみたかったというのもあるし、そうしたも のが全部織り重なってといったところですかね。

ロンドンで Quipper をはじめた時は、会社を設立する以上、きちんとけじめをつけて DeNA を辞めましたけれど、ダメだったら DeNA に戻らせてもらおう、くらいには思っていました。だから、その時も、あまり『大決断』ということではなく。

基本的にそういうことで深く悩まないんですよね。仮に戻れなかったとしても、今の豊かな日本社会では職はどこでもあるじゃないですか。よほどこだわって選ぶなら別ですけど。大学時代に新興国を含めて色んな社会を見たことで、『これじゃなきゃいけない』みたいな感覚が、少し薄いのかもしれません。家族が出来て固定費があがる前までは、普通にアルバイトとかしてカツカツで生活してもいいと思っていたし。そういう意味で言うと、『大決断でいざ起業!失敗したら死ぬ!』みたいなのよりは、ちょっと腰が軽いというか、あんまり重たく考えない方かもしれないですね。

ただ、とはいっても色々とお世話になった人との約束は守らなければならないですよね。Quipperを始めて今6年ですけど、やっぱり投資家の人や社員や顧客と約束したこと――今はリクルートグループに入ったわけなのでリクルートに期待されていること――そういった責任はきちんと果たさなければならないというのは分かった上で、ですが。あんまり生き方を狭く規定するのは、逆に今やっていることを頑張れなくなるんじゃないかなと思います。あくまで自分の意志として今やっていることを頑張っているということ、どんな逆境でも好きだからやっているということがパワーの源になる気がします。

吉川:自分のしたいことを、社会的なステータスやしがらみよりも、重視されるのかな、と感じたのですが、どういったお心持ちでロンドンで会社を始められたのですか?

渡辺さん:しがらみは寧ろ凄く重視する方だと思いますね。 寧ろしがらみ中心で判断していくところもあります。ただ、い わゆる『世間体』みたいなものはあまり重視しないんです よね。ちょっと、ややこしい話かもしれませんが、自由に生 きようと思ったら、身勝手にすることではなくて、逆に、『世 間体を超えた人と人との貸し借り』みたいなものが凄い重 要だと思っています。それが『しがらみ』ですね。その期 待に答えていくという部分ができて初めて、自由度があがる と思っています。例えば、さっきの話で言えば、辞めた会社にも戻ろうと思ったら戻れるとか。そこでの仕事をしっかりやりきっていて、『こいつに戻ってきて欲しいな』と思われていれば戻れるじゃないですか。

#### 教育と社会への問題意識

吉川:今の日本の教育に関して改善点や問題意識はありますか?

渡辺さん:今、僕はリクルートグループ全体の中でも教育事業の海外部門を見ているという位置づけになっていて、実際に新興国を飛び回る生活をしていますが、それらの国では、日本に比べて社会課題が大きいと思うんですよね。

日本なら僕のように片田舎のそれほど裕福じゃない家庭に生まれても、良い公共教育があって、いい大学にもいい会社にも努力すればいける。基本的には恵まれた社会だと思います。それをキャリア教育の精度を高めたり、効率的な形で、あるいはより先進的な形にさらに良くしていくことはできるとは思うんですけれど、個人的にやりたいこととしては、貧しい国の貧しい農村とかに生まれちゃったら本当に這い上がる機会が無いので、そういうところをテクノロジーで解決していくような部分ですね。世界全体で見てもインパクトが大きいと思うし、テクノロジーが本当に生きるのってそういう『取り残された』部分だと思うんですよね。

テクノロジーによるプラットフォームビジネスの本質っていうのは、情報流通コストを削減することであったり、マッチングコストを削減することであったりするので、情報がリッチなところを更にリッチにするより、例えばこの前モンゴルの少女がネットで勉強する中で才能を見出され、MITの数学科に入ったけれども、そういう人類全体の才能を見つけ出し大きなバリューが動くような、そういうところが醍醐味だと思うんですよね。ただ、とにかく教育分野は関係者が保守的で時間がかかるし、そういう、言うなれば『お金がない層』に、NPOではなくビジネスとして成立させる難しさもあります。まだまだこれからです。

#### 後輩の学生に向けて

吉川:最後に、学部の後輩へ向けてアドバイスをお願いします。

渡辺さん:これから10年で大きくキャリア、仕事や社会が変わっていくと思います。恐らくその引き金を引くのは人工知能や、ロボット技術、グローバル化あたりで、これらが混然一体となった社会変革がそう遠くない未来に起こると思います。世界がフラットになっていくときに、割を食うのは、今の世界での社会システムの恩恵を被っている日本の会

社であり、日本人です。これまで起こる起こると言われつつなかなか進展しなかったことが、一気に現実になる。そして、それは必ずしも、日本人にとってハッピーストーリーではない。Quipperもテクノロジーを使って良い教育を安価で世界中の人に届けるという意味で、そういうトレンドを後押ししています。

そうした時に、今の高度経済成長時代以降の価値観、もしかしたら数千年来の科挙的な価値観はおそらく近いうちに崩壊するんじゃないかと個人的には思っています。そうなったら、あんまり安定とかブランドとかランキングとか見栄とか、そういう現在の社会規範を元にした基準で選んじゃうと、凄く後悔というか、10年か20年経った時に、自分の信じてきた軸が全然、通用しない時代遅れな価値観になってしまうリスクがある。

だから、何をやるのが好きかとか、知的に面白いかとか、あまり外界の声とかそれこそ世間体とかに惑わされないで、もっと自分の心なり、好奇心なりに素直に向き合うべき時代になるのではないかと思います。一周回って、シンプルでわかりやすい世界になろうとしている、というか。

学生時代こそ、さらにリスクフリーなんだから、あんまり『かっこよさ』を求めずに、泥臭く好奇心に従って過ごして不安定な状態を楽しみ、実際にキャリアを選択する時もしてからも、好奇心を大切にして、全てが崩壊してしまったとしてもちゃんと生き抜いていけるような、あるいは自信を持って人生を辿れるような、『自分軸』を確立するのが大切なのでは、という気がします。



#### 井坂信彦さん

1974年生まれ。総人1期生で理論物理学を専攻。1997年に卒業後、エンターテインメント系のベンチャー企業に就職。その後1999年に神戸市議に最年少当選。現在は衆議院議員として活躍されている。※神戸市は震災直後に空港建設の計画を発表し、市はその際に住民投票を切望して集まった35万の署名を無視して、住民投票をするかしないかは議会で決定するとした。井坂さんはそのような神戸市の方針に疑問を抱き、住民の意見を議会に反映したいと考えて神戸市議会選挙に出馬された。

#### 総人に入った理由と学生生活

澤田: 井坂さんは大学に入る前から、物理学に興味をお持ちだったという事なのですが、なぜ理学部や工学部ではなく総人を志望されたのですか?

井坂さん: 実は1年目は理学部を受けて、だめだったので 1年間浪人をして、2年目に総人を受けました。私の出身 高校は学園祭に力を入れていて、3年生の特に男子は勉 強そっちのけで映画製作に取り組んでいたので、大体みん な浪人するんですよね。物理学に興味があったのは、当時 イギリスの理論物理学者であるホーキング博士が宇宙の 謎を解き明かしたことが世界に広まっていた時期で、それ を聞いて『いいなぁ』と思ったことが始まりです。それに加 えて、父親がサラリーマンで、学生の頃はかなり反発して いて、『父とは真逆の実社会に直接的には役に立たないよ うな学問を勉強してやる』と思って、宇宙に関する物理学 を勉強してみたところ、それがなかなか面白くて、大学も理 学部を目指していました。2年目も理学部を受験するつも りだったのですが、浪人中に京都大学に新しく総合人間学 部ができるという事を知り、その中には様々なコースがあっ て、理論物理学も学べるという事だったので、新しいもの好 きという性格も影響して、2年目は総人を受けることに決め ました。

澤田:学部時代はどのように過ごされていましたか?

井坂さん:授業としては理系半分、文系半分というバランスで履修していました。当時はカリキュラムが決まっていない講義も多く、話し合って決めていくこともあったので、面白かったです。また、主専攻は宇宙からは離れますが、理論物理学のカオス理論を選択し、副専攻は哲学で科学論・科学史を選択しました。でも、どちらかと言えば、勉強よりもバイトやバンド、寮の運営等が楽しくて、そのような課外活動に力を注ぐようになっていきました。

#### 卒業後

澤田:そのような学生生活を送られ、ベンチャー企業に就職されたという事なのですが、進路を決める際も、先ほどのお父様とのエピソードからいわゆるサラリーマンにはなりたくないと考えられていたことが想像できるのですが、どのように進路を決められたのですか?

井坂さん:まず、商売をしたいと思うきっかけとなったのは、学生時代に新しい雑誌を作って売るという小さな起業のような事をしていたことです。それは、『私こんなことできます』という人と『私〇〇で困っています』という人をマッチングさせるという、インターネットの掲示板のようなもので、今ではネット上でできるようなことを自分たちの足で動き回ってやることで、お小遣いを稼いでいました。その過程で商売も面白いなと思うようになり、普通に京大を出て大手の企業に勤めて今あるサービスを運営していくのではなくて、今無いサービスを世の中に提供することで、困っている人からありがたいと思ってもらえるような事をしたいと思うようになりました。それなら普通のサラリーマンではなくて、自分で起業してやりたいなと思い、それで卒業後の進路は社長の働きぶりを間近で見ることのできる神戸のベンチャー企業を選択しました。

澤田: やはり、ベンチャー企業で学ばれた事は大きいですか?

井坂さん:そうですね、何をして何をしないかという判断をすべて自分でしなければならない "個人事業主"という点ではベンチャーと政治家は近いところがあります。新規事業の企画と、それを自分で運営していくという所までを泥んこになりながら学ばせていただきましたし、自分が作ったものを自分でお客さんに届けて、喜んでもらえたという経験もできました。これは大きな組織ではできないと思いますので、そういう経験から学んだことは大きかったと思います。

澤田:政治家として働くことの面白さや苦労は何ですか?

井坂さん:我々の仕事は突き詰めると条例や法律等の"社会の仕組み"を作る仕事なので、最大のやりがいは自分の作った法律が通って、自分の思ったようにそれが機能し、世の中が狙い通りに変わっていくことだと思っています。一方で大変な所は、政治の世界では正解がなく、また、何かを変えると必ず損をする人がいることです。そういった人たちのためにまた別の仕組みを作って、マイナス部分を最小限に抑えるといったことが必要になるので、そこは政治の難しい所だと思います。

吉川:その利害調整は答えのない中で、どのように決断を 下されているんですか?

井坂さん: "なるべく多くの人にとってプラスになる"ということは一つのものさしになると思います。あとは、例えば30年後にどのような評価をされるかというような、いわば歴史の評価に耐えられるかどうかという事を考えるようにしています。

澤田:井坂さんの政治家としての目標はありますか?

井坂さん:私は特に大臣等の地位にはこだわっていません。そして、外交・防衛よりも"内政"に興味があります。もちろん外交も大事なのですが、多くの議員がその分野で頑張ってくれているので、私は日本をいかに底上げしていくか、という仕組み作りに力を入れていきたいと思っています。日本は先進国であり、少子高齢化という面でもトップを走っており、社会保障制度等で良い仕組みを作ることができれば、それは世界の手本になると思うので、何とかしてそれを作りたいと思っています。

吉川:現在に繋がっている、学問や学問経験から学んだこと、気付いたことはありますか?

井坂さん:1つは複雑系が主専攻だったので、世界が単純 じゃないということです。例えば高校の物理では、初めの玉 の動く方向がこれだけ違うと時間が経ったときの玉の位置 はこれだけ違う、ということが予測できました。複雑系では 初期条件が少し違うと、玉は最終的に全然違う位置に行っ たりして、それは現実の世の中にも当てはまるんです。政 治の世界では「今はちょっとの違いだから後々も知れてい るだろう。」なんて思ったら大間違いで、初めの僅かな違い が一年後には全然違う結果を生むことがよくあります。だか ら私は、「初めのちょっとの違いで後が大きく違う」という世 界観は今も凄く大事にしていますね。逆に複雑系でない物 理ばかりやってしまうと、法則的に「こうなったらこういくは ずだ」といった単純な考え方になってしまう。それってだい たい間違っているんですよね。

そういう世界観を私は理論物理から学びましたけれど、例えば農家の方なんかはちょっと天気が悪かっただけで米の取れ高が全然違うので、経験的にわかっています。勝利の方程式みたいに「これだけやれば米が 2 倍できる!」なんていうバカな話は無いとみんなわかっているんです。自然はまさに複雑系の最たるものだから、自然に関わっている人はみんなわかっていることですよね。そういう世界観を得られた点では複雑系を学んで今も活きていると思います。

後は副専攻であった科学論・科学史の方では、「何が正しいか」というのは実は結構あいまいで、正しさよりも納得のいく説明かどうか。全体を破綻無く説明できているかどうかだという考えを学びました。例えば、雷現象の説明に電子が使われるけれど、電子の粒が本当にあるのかといったら、量子力学までいくと粒は無いわけです。今の仕事でも、正しい政策なんか無いけれども、いかにみんなが「そうだな。」と思う説明をしきれるかの方が、正しさと同じかそれ以上に大事だと思います。

吉川: 今のお話の『みんなの納得感』というのは、神戸 市の住民投票の問題意識にも結びついているのですか?

井坂さん: あのときだって、住民投票をやれば良かったと 思うんですよ。神戸空港を作るか作らないかで住民投票を して、もし作らない=反対派が多かったとしても、住民投票 の結果に従わなくてはならないという法律は全く無いわけ です。仮に『神戸市民の意見では空港が要らない』となっ たとしても、それでも尚、『プロの目から見て、空港は今の うちに作っておいた方がいいんだ』と議員が言うのであれ ば、そこから説得をすべく、議論をすればよかったんです。 『住民投票では反対多数でした、ただ、我々が考えるとこう いう理由で今作っておいたほうがいい』と、反対が多くても 「やっぱり作った方が良い」という信念があれば、そこから 話をするべきでした。それをせずに、『住民投票をしたら負 けそうなので住民投票はさせない。私たちプロの議員が議 会の多数決で作ると決めたのだから作る。』とやってしまっ たので、住民の方も『勝手にやりやがって。見てみい、大 赤字でどうにもならへんやないか。』と思ってしまっているん ですよね。やはり大事なのは、ちゃんと説明をしていくこと だと思うんです。



特集 総人・人環学生研究プロジェクト 2015「はかる」

### 学生自主研究プロジェクトの企画を終えて

総人·人環活性化委員会小委員会委員長 佐野 宏(文化環境学系)



学際教育研究部、総 人・人環活性化小委員会 による「学生自主研究プ ロジェクト」の終了を受 けて、編集部からはその 報告をするようにとのこ とである。すでに一度、 このプロジェクトについ

ては紹介しているので、そのまとめとして感想め いたことを記しておきたい。

オープンキャンパスでとっさの返答に困る質問 に、高校生たちから「総合人間学部では何ができ ますか?」「この学部は何が専門ですか?」といっ たものがある。「教養」や「学際的」という言葉 も彼らの問いの答えには不十分で、結局「ここで はさまざまな専門分野が隣接しているので、たい ていのことは研究できます。自分のやりたいこと がまだ決まっていないのなら、きっとあなたの興 味のある分野を見つけてその最先端を学ぶことが できますよ。」と答えてしまう。そしてちょっと 申し訳ない気分になる。私の回答は嘘ではないけ れども、この畑からは何が取れますかと尋ねられ て、たいていのものは取れますよと答えるのに似 ていて、もうちょっとましな答えはなかったのか と悩むのである。ただ一つ言えるのは、種を播く 人がいなければ何の収穫もないということだけで ある。

確かに名称からは得体の知れない学部という雰囲気が漂うのだろう。正面切って「総合人間学」とは何かと考えた時に、ここにいる私も、そして

学生たちも、その得体の知れなさを感じていることと思う。

たとえば、総合人間学部の学生の帰属意識の希 薄さ、縦の繋がりの薄さが従来から指摘されてい る。多様な分野が隣接する本学部には学科という 単位がなく、学系が樟の太枝のように拡がってい る。何でも学び研究できるかわりに、自分のした いことは自分で探求せよということである。自ら に由ることの実質が学生の意欲と探究心に委ねら れているといえば恰好はよいけれど、要するに一 匹狼でたくましく育てというのが、本学部の特色 なのである。自由放任だが、特段に競争させる意 図はない。このスタンスは、最初から学生の帰属 意識はそれほど大きな問題ではない。

さらに主専攻と副専攻の存在は、学生らの時間 的な「自由」を奪ってしまってもいるという事実 がある。学費を稼ぐためのバイトをする学生から すれば、本学部は過酷な環境だともいえるだろう。 結果的に総人生は日々の学習と準備に追われて、 学生相互の繋がりを考える遑がない。

ところが、学生にアンケートを行うと大半の学 部生はやはり繋がりを求めており、帰属意識が希 薄だと感じる学生が存外に多く存在する。それは 他学部の様子と比較したときにとくに感じるもの であるらしい。

大きな問題ではなさそうだが、本学部のスタンスと学生の希望との間に何かしらのずれがあるらしい。委員会で議論されたのはこういった問題だった。

他学部と異なり、「総合人間学」は再生産性に乏

しい。これは委員それぞれの考え方も異なるが、総合人間学はなお対象化できないところがある。ここに所属する個人それぞれに「その学」があるといっても過言ではない。細かに枝分かれする樟の瑞枝のように、その一葉一葉に「総合人間学」は存在している。それを生み出すのは、枝であり、韓であり、樟が拠って立つところの土壌である。

新芽が芽吹くことそれ自体が総合人間学だというのはあまりに乱暴にすぎるが、新しい学がどこに生じるかは予想がつかない。けれども、その可能性だけは常にどこにでもあり、その芽吹きを何よりも大切にするというのが本学部の特徴である。

学際的研究といっても、何を以て「学際的」と みなすかも、分岐点をどこに捉えるかで見方は異 なる。しかし、分岐点は同時に結節点でもある。 その結節点をなすことが総合人間学の一つのあり 方である。つまり、総合人間学の実践には個々の 「強さ」が必須の要件である。学生に対して学際研 究を求めることは、他分野融合という言葉とは逆 に、「群れない」こと、すなわち他分野融合の接点 たるべくその個性を維持することを求めることで もあるから、結局は個々人の中に学際研究が宿っ ても、それをそのままの方法で継承できない。真 似ができないから、ひとりで考えようとする。し たがって、帰属意識は希薄になるという関係にあ る。その幹があることは自明だからこその、帰属 意識の希薄さでもある。だから、帰属意識の希薄 さは「総合人間学」の正しいあり方なのでもある。

けれども、総合人間学は確かにつかみどころがない。得体が知れない。一方で、個々の研究室では専門的な研究と教育がなされているから、そこだけをみれば、他学部の学科・研究室と変わらない。すぐ隣に異分野の最先端があり、必要ならばいつでも尋ねられるところに、本学部の特色がある。これは非常に贅沢な環境なのだが、基礎的な知識が乏しくまだ専攻も決まっていない学部生に、一人でたくましく生きろというのはさすがに酷な環境でもある。これを他学部と比較したときに、自分は帰属意識が希薄だと感じるのであるらしい。

「学生研究プロジェクト」は、チームが異分野・ 隣接分野の結節点になることを企画したものである。繋がりを求める学生が「総合人間学」を実践する上で、チームを組織することは理に適っている。個の強さはチーム編成を難しくするために、その運営には代表者のリーダーシップもしくは経営手腕が必要になる。さらにチームには人間・環境学研究科の院生が入ることを条件にした。院生に知人がいない場合は委員会が適当な院生を斡旋するという形である。

これは初めてチーム研究をする学生たちに研究 の進め方や発表の仕方の手解きを院生が行うこと を期待したからである。もちろん学生たちは個別 に教員に尋ねて意見をもらったり、指導を仰いだ りしているから、研究それ自体に院生が関与する というのではない。あくまでもオブザーバーとし ての参加である。院生が研究指導するわけではな いが、将来、教育・研究に携わる者として、学生 たちを導く、実習の一つにもなると考えてのこと である。

学部生と院生との距離を近づけて、縦の繋がりと横の繋がりを模索するというのは学生自主研究プロジェクトのねらいでもあった。結果として、このプロジェクトに参加した学生や院生たちの満足度は高く、研究を進める中でネットワークを拡げて希望する企業への就職を決めた者、研究へのさらなる興味から大学院進学を希望する者が現れるなど、それぞれに得るものがあったようである。

この学生自主研究プロジェクトの今ひとつの特徴は自分たちの研究成果を他の学生や教員の前で発表することを課した点である。前提条件や共有された知識基盤がない相手に、自らの研究成果を語るのは容易ではない。さらに自分たちが感じる面白さを分かりやすく伝えるのは難しい。

ところが、自らの考えや調査結果を専門外の 人々に語り、そして最終的に発表する上でも、初 めて聴く者への工夫がみられた。これは学生たち の能力の高さによるところが大きいが、いずれも 分かりやすく、また聞きやすい発表だった。 個別に尋ねてみると、意見を交換して議論する中で、お互いが持っている知識を伝えることの大切さと知識の共有に自覚的になっていったとのことである。オブザーバーとして参加した院生や、質問に答える教員の有形無形の指導があったとはいえ、委員会が考えていた以上の成果だった。

さらに興味深かったのは、研究成果発表会に参加してくれた院生や学生たちとの質疑応答である。問題点や疑問点を率直に質問する学生や院生とのやりとりをみていると、専門外の内容に対してもきっちりと反応できることがよくわかる。それは成果発表会後に行った来聴者へのアンケートをみても窺える。

この小委員会は当時の冨田恭彦研究科長の下、 阪上雅昭委員長をはじめとして教員の委員、さら に有志らの院生・学部学生も参加するものだった。 院生や学部学生たちの意見を聴きながら進めた企 画だった。プロジェクトに応募した新井翔太氏や 吉川将平氏は企画段階では学部学生で積極的に意 見を交わした。阪上委員長のもとで教員と学生が 対等な関係で議論できたのは非常に興味深い経験 だった。企画はいくつも出され、その都度、実現 可能性を検証しつつ、さまざまな援助を学際教育 研究部から得ている。

この場を借りて学際教育研究部には感謝の微意を表する。私が経験した他大学でも学生と教員がともに企画を出し合うような学内委員会は知らない。ましてお互いに缶コーヒー片手に、本学部の何が問題だろう、どんな企画をすれば良いだろうと、月に1回多い時には2回、院生と学生そして教員が同じテーブルで議論することはなかなかない。他大学から赴任してきた私にとっては衝撃的な委員会だった。けれども、こういうことができる雰囲気が本学部の一番の特色なのだろう。

教員と院生、学生が一緒に企画したのが学生自 主研究プロジェクトであった。それぞれに興味深 い内容だったが、いま少し記録程度にその概略を 記して、この報告を閉じておきたいと思う。 2013年度は研究テーマを「みる」と設定した。研究テーマは応募者の自由なので何でもよいことにしたが、全くの自由では思いつかないから、キーワードを研究テーマとして掲げることにした。企画の最初の年は「みる」である。しかし、観察する意でなくてもよく、応募のポスターには John Stuart Mill でも良いということがわかるようにした。思いつきで何とでもできるようなものを選んだのである。

2013年度学生研究プロジェクト研究研究テーマ「みる」

中元洸太(代表):現代日本に見るお化け屋敷 須田智晴(代表):「形に現れるもの」をみる 新井翔太(代表):総合的に学問して"みる" ~ B'z という対象を使って多角的に"観る"~

最初の年ということもあって、手探りではあったけれども、上記のような研究が採択された。各研究チームには共同で使う研究室が与えられる。予算は各10万円である。全国のお化け屋敷をみてまわるチーム、数学的美とは何かを探求するチーム、音楽における生命線は何かを探求するためにCDを集めるチームである。この時の研究の概要は本誌53号に掲載されている。

2014年度は研究テーマを「きく」とした。

2014 年度学生研究プロジェクト研究 研究テーマ「きく」

藤井富秀(代表):

学生と教員がお互いの声を「きく」Web 上ツール の開発

奈良美和子(代表):京都に"きく"観光と教育 山森実希(代表):時間評価

――人に聞く「あなたの中でどれだけの時間が過ぎましたか」

上記が採択研究である。藤井氏の Web ツールの開発は成功しており、実演もしてみせている。

奈良氏の観光についての研究は観光客の増加に伴うゴミや環境問題をどう考えるかというものである。いわゆる東アジア観光客の「爆買い」がみられた時期のものであって考えさせられる。

山森氏は前年度の中元氏らのチームに参加している。その中で、お化け屋敷では客観的な時間と主観的な時間認識にずれがあるのではないかとの疑問から新たな研究を試みたものである。これらの研究概要については、本誌 55 号に掲載されている。

2015年度は、本委員会が一つの役割を終えたとして発展的解消をするに至る年であった。しかし、学生の希望もあり、募集することにした。研究テーマは「はかる」である。この年の採択研究は次の2件であった。

2015 年度学生研究プロジェクト研究テーマ「みる」

吉川将平(代表):

「総合人間学」はいかに活きうるのか

申 大樹(代表):流行を企図(はか)る

――ベトナムの国民的スポーツ「ダーカウ」の実践 的研究――

吉川氏のものは、本学部卒業生に総合人間学が社会でどのように活用されるのかをインタビューして、それをまとめるというものである。申氏のものは、「ダーカウ」というスポーツについて実際にベトナムに調査にゆくというものである。申氏のチームはこの企画で初めての海外渡航であった。ちょうど越中間での政治的緊張が報道にも現れた時期でもあったから、委員会としては大使館その他関係部署に現地の情勢を照会するなどして万一に備えた。途中、同行するメンバーの体調不良などアクシデントもあったが、申氏の適切な判断もあって事なきを得て、十分な調査を終えて帰国してくれた。

吉川氏の研究テーマは、彼が委員会で企画した 一部を研究として組み立て直したものである。委 員会での企画では総人生の卒業生から寄稿を募って文集を作ってみたいというものである。卒業生がどのような企業で活躍しているかは就職先リストでわかるけれども、具体的に本学部で学んだことはどのように活かされるのかを聴いてみたいというものであった。それには卒業生による寄稿集を作ってはどうかというのである。活躍する卒業生の、生の声を聴きたいというのは就職を控えた学生からはよく聞かれる。

サークルやクラブ活動をしていれば、卒業生と 知り合う機会も多いが、そうではない学生は OB・ OGの情報を蒐集して訪問しなくてはならない。し かし、予め卒業生の様子が分かっていると尋ねや すい。そうした情報源として卒業生の寄稿集を作 りたいというのである。この企画は最終的に予算 や人員配置の問題もあり、残念ながら委員会存続 中には実現しなかった。

吉川氏の研究は総合人間学が社会において活か されている事実を、社会で活躍する卒業生にイン タビューして実証しようしたものである。

この時の研究概要は本誌に掲載されているので 是非御覧いただきたい。

本誌 53 号に阪上雅昭氏は、2013 年度学生自主 プロジェクトの総括の中で、彼らの研究は教員の 尺度を超えて得体の知れないものであるとした上 で、しかし「私はその得体の知れないものに惹か れる気持ちを無視することはできない」と述べて いる。そして、その「得体の知れないもの」の中 に「総人的なもの」が潜んでいるのかもしれない と結んでいる。

私もまたその得体の知れないものへの魅力を感じずにはいられない。プロジェクトの研究は、全ての採択課題で何か新たな学術的成果が得られたというわけではない。けれどもそれは既存の枠組みと尺度からみればという話であって、今はたとえ未熟でも今後興味深い研究は見られた。「総人的なもの」は私も見極められないが、しかし、それぞれに専攻が異なる者同士が集まり、純粋に知的好奇心から対象を研究してみるという中で、その

参加者が皆「楽しかった」という。そして、その成果発表を聴いている私もまた「楽しかった」。この「楽しさ」は、恐らくその場で一緒に考えながら聴くからだろうし、知らなかったことが分かる「楽しみ」でもある。

最初に私は樟の枝葉に総合人間学を喩えてみたが、それは既存の学系を踏まえた大人の譬喩であって、必ずしも当たらないと告白しなくてはならない。どんな種を播きどのように育てるかはその人の「自由」であって、そこに芽吹いたものが、たとえどれほど得体の知れないものであっても、その芽吹きを大切にする人たちが集まっているのが総合人間学部であり、本学部が誇る肥沃な土壌なのだろう。

卒業する学生たちに、「あなたの畑では何が取れましたか?」と問うたとして、そこにどんな花が咲き、どんな果実が得られるのかは、多分そのときにはまだ気づかないのだろう。しかし、振り返ってみてその一連の活動を「楽しかった」と卒業生たちが思ってくれるのなら、本学部の教員として存外に大きな成果だと思うのである。

「得体の知れないもの」への魅力と興味がさらに 高まった。こんなことを考えさせられたのがこの 企画に携わっての一番の収穫だった。

さて、高校生には何と説明したら良いだろう (さの ひろし)

### 新任の先生方より

### 精神病理学への誘い

### 松本 卓也 (人間科学系)



2016年4月に着任しました松本卓也です。高知医科大学(後に高知大学と合併)の医学部を出たあと、自治医科大学附属病院で初期臨床研修と精神科医師としての研修を行い、同大学の大学院を修了後、民間精神科病院

で一年間働いたあと、京都大学に赴任しました。

私はこれまで、主に「精神病理学(psychopathology)」という学問(と、本邦ではその学問のなかで受容されてきたフランスのラカン派の「精神分析(psychoanalysis)」)について研究を行ってきました。京都大学で教えているのも、この精神病理学と精神分析理論です。

精神病理学というのは、簡単にいうと「文系的な方法論によって、人間の精神病理(主として精神疾患において現れる異常心理)の成り立ちとありようを明らかにする」もので、文系と理系の境界線上にある、すこし変わった学問であるといえるでしょう。ですが、実はこの奇妙な学問は、医学のなかにある精神医学にとっての基礎理論でもあるのです。

精神医学は、他の医学(内科学、外科学など)と比べるとだいぶ後になって生まれた学問です。というのは、かつては、精神の病は悪魔が憑依したものであり、魔女は悪魔と盟約を結んで様々な超自然のな力を発揮すると考えられていましたした近代の移行期には精神病者は次第に僧院などに収容されるようになりましたが、そこでは患者がどんなことを考え、語っているのかについては対がどんなことを考え、語っているのかについては対がどんなことを考え、がなかったのです。近代セート分に調べられることが多いのですが、彼は当時の啓蒙思想に依拠し、「精神病者の鎖からの解放」を

行ったとされています。こうして、鎖から解放された患者たちが何を考え、語っているのかが聞き取られるようになりました。すると、その患者たちに現われている思考や感情の成り立ちとありようを植物を分類するように分類し、適切な名前を与えるような学問が生まれます。それが、精神症候学と疾患分類学であり、後にそれらを総称して「精神病理学」と呼ぶようになったのです。

20世紀に入ると、後に哲学者となるカール・ヤ スパースが、初期フッサールの記述心理学やディ ルタイの了解概念を用いて精神病理学を方法論的 に基礎づけ、精神症状の的確な記述、分類、命名、 類型化などを主として行う「記述精神病理学」が 生まれます。そして、その後には、ハイデガーの 存在論や、フッサールの現象学に依拠しながら人 間の存在論的なありようから精神疾患を考察した り、患者と医師の「あいだ」「出会い」の場におい て立ち上がる現象を取り扱う「現象学的(人間学 的)精神病理学」が誕生します。さらに、フロイ トの精神分析のように、精神症状の症状の背後に ある無意識的な機制や動機を重視し、症状の意味 の解釈に重きを置く「力動精神医学」が登場し、 それまでの精神病理学と絡み合いながら展開して いきます。さきほど名前をあげたラカン派の精神 分析は、古典的な精神病理学を背景としながら、 フランスの構造主義やポスト構造主義の理論を力 動精神医学に導入したものと考えることができま

「精神病理学」というと、何やら医学部でだけ研究されているような理系の学問のようで取っ付きにくく思えますが、実はこのように、哲学や現代思想などとも深く関係しており、これまでの人文科学、社会科学、自然科学を融合した新しい学問の体系を構築することを目指す総合人間学部らしい学問なのです。興味をもった学生さんは、ぜひ精神病理学や精神分析を学んでみてください。

(まつもと たくや)

### 二人の先生から学んだ姿勢

### 柴田 悠 (人間科学系)



総合人間学部(以下、総人)の魅力の一つは、 文理の垣根を超えた広い 視野で、柔軟に物事を考 えておられる先生方がい らっしゃることだ。本稿 では、私が総人生の頃に 出会って惹かれた二人の 先生について、どこに惹

かれたのかを回想してみたい。それによって、私 が今後の研究・教育のなかで「大事にすべきこと」 を確認できるだろうからだ。

まずお一人の先生は、私の卒論の指導教員になっていただいた先生である。私は先生のどこに惹かれたのか。それは先生が、哲学(文理の垣根を超えてこの世界をどのように考えるべきもなるできるに問い直しながら、さまざまな現場に赴いて直接経験し(さらにときに現場の方々とともに活動し)、そのフィールドワークをベースとしながら、事例研究だけでなく統計分析やシミュレーションも活用し、自らの問いを幅広い視野で柔軟に追究しておられたところだった。私にとって、「研究者はまさにこうあるべき」と感じることができる先生だった。

先生の研究室への配属が決定した頃、私は、ある現場でアルバイトをしていた。その現場で見た人々の行動パターンを、私なりに分析し文章にまとめて、インターネット上の私の個人サイトに掲載していた。

研究室受け入れのお礼をお伝えするために先生に送ったメールで、そのサイトを紹介させていただいた。とてもお忙しい先生だったので、読んでいただけるとは思っていなかった。しかし後日、先生から予期せぬお言葉をいただいた。「現場のページを読んだよ。私の知らない現場の話で、とても面白かった。そして、現場の経験をベースに考察が加えられている。これが学問というものだ」というお言葉だった。「学生に歩み寄ろう」「学生か

ら学ぼう」というその謙虚なご姿勢に、とても感動したことを憶えている。

私が今後大事にしたいのは、先生のような謙虚な姿勢である。その姿勢が、広い視野による柔軟な研究姿勢にも、通じているように思われるからだ。それを自らのご姿勢によって教えてくださった杉万俊夫先生は、本年度いっぱいで定年退職となられる。杉万先生から教わった研究・教育の姿勢を、私も学生たちに見せていきたいと思う。

もうお一人の先生は、私が四回生の頃に書いた 論文を、快く読んでくださってコメントもくだ さった先生である。私はその先生の授業は受けて いなかったが、先生の著作を通じて、文理の境界 を超えたその深い考察に魅了されていた。そのた め、ぜひともコメントをいただきたかったのだ。今 から思えば、当時の先生は(今もそうだが)実に 多くの原稿を書かれていて、多忙を極めていたは ずだ。にもかかわらず、受講生でもない学生から メールで突然送られてきた論文を(その学生が、先 生と親交のあった杉万先生の研究室の学生であっ たにせよ)読んでくださり面談でコメントもくだ さった、ということが私には感激だった。

コメントの細かい内容は今では思い出せないのだが、とてもにこやかに、論文の可能性を引き出すコメントをしてくださったのは憶えている。学生は、教員から語られた内容よりも、その語り方(姿勢)を深く心に刻むということかもしれない。いずれにせよ、ここでも私は、学生の視点に歩み寄ってそこから可能性をポジティブに引き出そうとするご姿勢に、深く感動したのである。思想や社会学に関心が移行しつつあった私は、その後、先生の研究室への大学院進学を決断した。私が研究者をめざしてこれまで歩みつづけて来れたのも、四回生の頃に、また院進学後に、大澤真幸先生が見せてくださったそのポジティブなご姿勢があってこそのものだった。これからは私が、学生たちの知的な可能性を引き出していきたいと思う。

(しばた はるか)

### 研究を他者に語る

#### 木下 千花 (人間科学系)



恥ずかしながら、私は 京都大学と京都という街 に抽象的な憬れを抱いて いた。だから高校二年ま では京大の文学部(まだ 総合人間学部はなかっ た)が第一志望だったし、 結局、前期は高校の先生 の説得で実家から30分

の東京大学を受けることにしたものの、後期は京 大に出願した。送られてきた受験票を使うことは なかったが、あのころオープンキャンパスなるも のが存在したら、私は学部から京大に来ていたの かも知れない。そうしたら、私の前任者である加 藤幹郎先生の授業を取って、こんなに回り道をす ることなく日本映画史研究者になっただろうか。 あるいは自主映画制作などの活動にはまって歯止 めなくボへミアンな生活を送っただろうか。

でも、心配しないでいただきたい。私は多分、京 大愛の強さを少し捏造しているし(東大教養学部 の蓮實重彦先生の映画批評は高校生の頃から読ん でいた)、喜びに浮き足だって京都人になれるなん て痛い勘違いはしていない。だが、着任からジェットコースターのような1年が過ぎた現在でも私の 幸福度が基本的に高止まりしているのは、京都に 移住することによって再び「ノン・ネイティヴ」 ステイタスを獲得したからであり、人環や総人の 研究・教育環境には他所者を受け入れる寛容さと 合理性があるからだと思う。

東京での学部時代には週5本は映画館で映画を 見て、修士課程に進学してからは批評家の真似事 もさせてもらった。そうした駒場の映画学徒の常 として私もパリ留学を夢見ていたのだが、突如、ア メリカに方向転換した。広義の政治への強い関心 を抑圧気味だった私に英語圏の映画研究は魅力的 に思われた、というのが公式見解だが、実は単な る天の邪鬼だったのかも知れない。しかし、自分 の実力不足に正面から向き合うことが出来ず、納 得のゆく修論を書くことができなかった私が、フルブライト奨学金を得てアメリカに留学することができたのは幸運としか言いようがない。シカゴ大学大学院の映画学の教室では、東京シネフィル的趣味などまったく共有されていなかったし(トム・ガニング先生は由緒正しいシネフィルだったが)、日本研究ではみんながいちいちジェンダーだの階級だの騒ぐので、最初は当惑した。しかし、やがて言語的にも文化的にも「ノン・ネイティヴ」である居心地の悪さに慣れ、「外国人(さらに正確に言うと東アジア人)」になることが出来たのは、私にとって解放だった。結局、1997年から2006年までアメリカ各地を転々とし、2010年に帰国するまではカナダのウェスタン・オンタリオ大学映画学科で教えた。

映画は強烈な感情移入や没入を生み出しうるの で、北米でも日本でも、人間的に「共感できる」 「気持ちを代弁してくれた」映画作品が好まれる (総人だと例外も多々あるが)。私も映画を見てし ばしば泣くし、「わかる」心地よさもわかるのだ が、卒論以来、狭い意味での研究対象としては監 督・溝口健二を追い続けて来たのは、この人の映 画に人間的に共感しているとは言い難く、何が何 だかわけがわからないのに、ひたすら凄いからだ。 また、アメリカで博士論文を書く過程で映画史研 究に目覚めた。学部時代から溝口の映画とサイレ ントからトーキーへの移行の関係がずっと気にな りながらも、基本的には既存の映画史や聞き書き を鵜呑みにし、同時代の批評はつまらないと軽ん じていた。ところが、初期映画やアメリカ映画研 究の同輩に倣って『キネマ旬報』をはじめとした 雑誌を丹念に読んでみると、現在では想像もでき ない奇妙な上映方法、サウンドシステム、批評概 念がひしめいていることがわかり、すっかり魅了 された。歴史研究も芸術も他者性との出会いだと 思っている。

(きのした ちか)

### 「誘惑」としての授業

### 武田 宙也 (人間科学系)



2016年4月より、人間科学系・創造行為論関係に准教授として着任しました。かつて学生として、学部(文学部)・大学院(人間・環境学研究科)あわせて10年ほどを過ごした愛着のある母校

に、このような形で戻ることがかない、大変うれ しく思っております。

私の専門は美学・芸術学で、これまでは、おもに近現代の哲学・思想を参照しながら芸術と社会の関係について考察してきました。芸術や芸術家というと、一般には社会から遊離した、いわばどこか「浮き世離れ」したものというイメージを持たれることもしばしばではないかと思いますが、少しでも歴史を参照すれば明らかなように、実際にはそれらは、その時々の社会のあり方と無関係であったためしはありません。こうした観点から私は、芸術という(一見個人的な)営みがいかに社会から影響を受け、また逆に、それに影響を与える中で生成・展開してきたかということを、思想的・歴史的な面から研究してまいりました。

そもそも私が美学という学問に興味を持つようになったきっかけは、文学部入学の初年度にとった全学共通科目、当時篠原資明先生が担当されていた芸術学の講義にあります。その初回に、先生がにこにこしながら「この授業では、「ぶっとんだ」芸術家たちの話をいろいろとしたいと思います」とおっしゃったことを、いまでも鮮明に覚えています。実際それは、20世紀の前衛の歴史を扱ったもので、先生らしくユーモアに富んだ語り口で、芸術が本来持つ「規格外」の性格を魅力たっぷりに伝えてくださるものでした。この出会いに衝撃を

受けた私は、以後学部の4年間、毎年先生の授業 を聴講し続け、次第に「これだ!」という思いを 深めていきました。つまり、自分が学びたいのは まさにこういうことなのだと考えるようになり、 また、どうやらそれを扱うらしい美学なる学問を 志すようになった、というわけです。それは、先 生の授業を通じて美学という知に「誘惑」されて いった過程と言い換えることができるかもしれま せん。こうして大学院から人間・環境学研究科に 籍を移した私は、自分と同じように、先生の授業 に魅了され、他学部から移ってきた院生たちと出 会うことになります。彼らは、たとえば薬学部出 身でファッションの研究をしていたり、あるいは 法学部出身でパズルの研究をしていたり…という ように、出自や関心はばらばらでしたが、皆、学 部生の頃に篠原先生の授業に出会い、美学に「誘 惑」された、という点では共通していました。

思うに、全学の授業とは、このような「誘惑」の可能性、つまり(ときに規定のルートを逸脱させるくらいの勢いで)意外な方向に学生を牽引する可能性に満ち満ちた場であり、それが大きな魅力をなしているとさえ言えるのではないでしょうか。もちろん、大学の授業において、個々の知識や方法論の伝授が重要であることは言を俟ちませんが、とりわけ、あらゆる学部の学生を対象とした教養教育の場合、どのような形であれ学生を「その気」にさせること、つまり何らかの知へと誘惑することもまた、果たすべき大きな役割の一つであるように思います。そのようなわけで、私としましても今後京大で、一人でも多くの学生を「誘惑」できるような授業を心がけてまいる所存でおります。

(たけだ ひろなり)

### 教養部で掴んだきっかけ

### 足立 匡義 (認知情報学系)



2016年4月1日付で、 総合人間学部認知情報学 系、大学院人間・環境学 研究科共生人間学専攻数 理科学講座に着任致しま した。前任地は神戸大学 大学院理学研究科数学専 攻で、そこで18年半、教

育・研究に従事しておりました。前任地のキャンパスは六甲山の麓にあり、坂道の勾配のおかげの付近の歩道を自転車が通るということはあまきさいているという。こちらでは、歩道を歩いないといけませんので、勝手が違い、着任当初はびくびらもでは私も、修学院離宮の近くでもので、防事もしておりまで自転車で移動する学生達のよいないけ、京都大学に戻っております。理学部を卒業して25年、久っております。

高校で習う範囲の物理学については得意だったということもあり、折角京大理学部に入学できたのだから、物理学を専攻しようと入学当初は思っておりました。その物理学の授業で大変印象深かったのは、一回生のときの、教養部での小玉英雄先生のものです。講義名は覚えていないのですが、その内容には特殊相対性理論が含まれていました。小玉先生の授業の進度は非常に速く、「ひかりより速いこだま」と友人が言っていたのが懐か

しく思い出されます。ただ、印象深かったという のは、その進度の速さのことではなくて、単に授 業を受けただけでは理解し得ない内容のものが大 学にはあるのだということです。それを小玉先生 の授業で痛感させられました。そこで、私と同じ く物理学を専攻しようとしている同級生の有志と 共に自主ゼミを立ち上げ、内山龍雄の『相対性理 論』の輪講を始めました。その講義の単位を取る ため、という単純な理由で始めて、当初の目標は 達成したのですが、その後も内容を変えて量子力 学を勉強していくこととなり、その自主ゼミは私 達にとってかなり意義あるものとなっていきまし た。特に私の場合、その輪講で用いたメシアの『量 子力学』をきっかけに、数学の立場から物理学を 眺めるというのが自分には向いているのではない かと思うようになり、数学を専攻することにした という経緯があります。そして図らずも、現在私 が研究しているのは、量子力学の基礎方程式であ るシュレーディンガー方程式で、関数解析学的手 法を用いてその研究を行っております。これは数 理物理学の一分野に位置付けられるものです。縁 あって入学できた京大で、幸いにも一・二回生の ときにその後の自分の方向性を定めるきっかけを 掴むことができた、と言ってよいと思います。

さて、京大で教える立場となったいま、何らかの形で学生の皆さんに「きっかけ」を提供できるようにしたいと考えております。実現するのはいつのことやら、なのですが。今はただ、その機会が与えられていることを非常にありがたく思っている次第です。

(あだち ただよし)

### lernen と studieren、その違いが大事

細見 和之 (国際文明学系)



2016年4月に、大阪府立大学からこちらに着任しました。ドイツの思想集団のフランクフルト学派、固有名詞では、アドルノ(1903-1969)、ベンヤミン(1891-1940)、ホルクハイマー(1895-1973)といったひとたちの思想

を、当時の時代背景、すなわち、ナチス支配下で 最終的にはホロコーストにいたるような状況をふ まえて研究しています。

私の出身は大学院まで大阪大学ですので、京都 大学とは縁がなかったようですが、じつは私が現 在の研究にいたるうえでは、京都大学の歴代のド イツ語の先生方から多くを学んできました。野村 修さんのベンヤミン研究、田口義弘さんのブー バーとリルケの研究、池田浩士さんのブロッホや ナチスの研究、小岸昭さんのマラーノ(改宗ユダ ヤ教徒)研究などは、学生時代からいまにいたる まで、私にとってかけがえのない導きとなってい ます。尊敬するみなさんが教えておられた職場で 仕事ができるようになったことを、とてもうれし く思っています。

くわえて、私は学生時代から詩を書くことも続けていて、実作者としての経験をふまえたうえでの現代詩を軸にした文学論も、私の研究の大事な柱のひとつとなっています。要するに、主として20世紀のユダヤ系の思想と文学、それをそれぞれの歴史状況を背景に考察するというのが、私の研究の大きな枠組みといえます。

そういう研究を行ううえで、大学院のときから、ドイツ語を軸にして英語、フランス語も活かしてきましたが、それだけでは足りず、1995年からはイディッシュ語を学ぶようになりました。イディッシュ語は、ホロコースト以前に、東ヨーロッパに暮らしているユダヤ人たちが日常語としてい

た言葉です。とくにイディッシュ語では、イツハク・カツェネルソン(1886-1944)というポーランドのユダヤ系の詩人・戯曲家の研究を続けてきました。ナチスはポーランドに侵攻して、ポーランドの各都市にゲットーを作り、そこにユダヤ人たちを押し込めます。そのときワルシャワ・ゲットーで暮らしていたのがカツェネルソンです。家族をトレブリンカ絶滅収容所に奪われ、自らもアウシュヴィッツで虐殺されることになる詩人です。

じつはカツェネルソンはイディッシュ語とヘブライ語のバイリンガルで、ゲットー以前にはヘブライ語でも多くの詩や戯曲を発表していました。カツェネルソンを研究するうえではヘブライ語の作品も欠かすことができません。なかなかヘブライ語の学習を進めることができなかったのですが、幸いこの夏、なんとか辞書その他と首っ引きでヘブライ語を読めるようになりました。いまはカツェネルソンが残した『夢と目覚め――子どもたちのための物語集』をヘブライ語から訳しています。

とはいえ、研究者にとって言語の習得は罠でもあります。よく学生に、ドイツ語における動詞lernenと studierenの違いとして説明していることですが、すでにある出来上がったものを身につけるのが lernen、自分独自の新しい研究を進めるのが studieren です。ですから、高校までの学習は lernen、大学での研究は studierenとドイツ語でははっきりと使いわけます。研究者にとって言語の習得はえてして lernen に終わってしまい、それが studieren にまで繋がらない可能性があるのです。場合によっては、studierenから lernenに逃げてしまうということにもなりうるのでした。

ともあれ、新しく習得した言語を研究にきちん と活かすのが容易でないのも事実です。どうか私 のヘブライ語がわが studieren の優れた道具とな りますように!

(ほそみ かずゆき)

### 京都大学総合人間学部という「場」

太田 出(文化環境学系)



環境のすばらしさに感動していましたので、こう して着任できたことに心から感謝しています。

着任後8ヶ月余り、少しずつ京都の町並みを見る余裕が出てきますと、これまで以上に京都の魅力にとりつかれるようになりました。徒歩で行ける大学周辺の銀閣寺や哲学の道、平安神宮、南禅寺などはもちろん、繁華街の三条や四条でも近代的な建築物と日本の伝統美を今に伝える建築物と的な建築物と日本の伝統美を今に伝える建築物とがうまい具合に同居しており、ちょっとした小道に入っても心を躍らされるような発見があって、京都の奥深さを認識する毎日です。このようなも京都生活を楽しみたいものです。

私は中国の近世・近代史を専門として研究して います。博士論文では清代中国の裁判文書などを 利用して、犯罪・警察・監獄から見た江南デルタ (現在の上海から南京へと広がる経済先進地帯)の 地域社会の有り様について考察しました。つまり 完全に歴史学のオーソドックスな手法である文献 史料の読込・分析に重点を置いていたのです。し かし上記の地域では航船が匪賊に襲撃されるとい う強盗事件が多発しており、船上生活漁民(中国 の主な内河・湖沼で捕魚する漁民は多くが船上生 活をしていた)が犯罪者と見なされ捜査の対象と されている事例が多いことに気づき、船上生活漁 民研究の重要性を感じるようになりました。とこ ろが、こうした船上生活漁民に対して、文字を残 すような知識人はほとんど関心を払わず、文献史 料中に彼らに関する記載をさがしだすことは不可 能に近かったのです。

そこで 10 年ほど前から始めたのが、現代社会のなかに近世・近代の残滓をさがすフィールドワーク(現地調査)という手法でした。新たな文献史料

を求める公文書館(檔案館)調査はもちろん、景観調査や碑文調査、さらには老漁民(今もなど、現出生活を続けている)へのインタビューなど、現地でしかできない調査を次々と実施しました。すると文献史料の読込・分析だけでなら、自分養知とないて自分の目で確かめる"現地感覚"を取り入れたのです。おかげで船上生活漁民で歩なりの成果を収めることができました。とりわけ、かつて被差別民とされ、その検知とされ、かつて被差別民とともに文献と対したの有名な「解放令」の発布とともに文献と対に、文献と対に、文献と対に、本の有名な「解放令」の発布とともに文献と対に、それに、大学の表示に、この表示できません。まさにフークの醍醐味といえるでしょう。

総合人間学部は、こうした研究遍歴をたどって きた私にとって、新たな魅力を提供してくれる 「場」といえます。総合人間学部には、私と同業で ある歴史学や、手法を共有できる文化人類学の先 生方だけでなく、これまでほとんど縁のなからた 理工系の先生方もいらっしゃり、居ながらにして 学際的な研究が可能となるからです。このように 幅広い分野の先生方と語り合い、共同研究を行う ことで、新たな研究の地平を模索することもできる でしょう。さらにそれを多くの可能性を秘めて いる学生・院生たちに伝えることもできるのです。 このような恵まれた環境で研究・教育できるだ らしいチャンス。私はこれを大切にしていきたい と考えています。

最後に、読んでいてくれる総合人間学部の学生・ 院生たちに一言。近年は外交・政治上のさまざまな問題から"嫌中""嫌韓"の学生・院生が多くなっていると聞きます。私個人は「好き」とか「嫌い」とか感情によって研究することの価値・意義を決めるのには同意しかねますが、かりに「好き」でなかったとしても、中国、韓国はもちろん、台湾、香港、北朝鮮などは同じ東アジアの国々、やはり無視はできないし、相互理解が必要なのはいうまでもありません。「日本大好き」でもいいですが、もう少し同じ東アジア、ひいてはアジアの人とあなもう少し同じ来アジア、ひいてはアジアの人とあなたの今後の生き方に少なからぬ影響を与えてくれることでしょう。

(おおた いずる)

### 着任のご挨拶: 京都からアイルランドへ、アイルランドから 京都へ

池田 寛子 (国際文明学系)



2016年4月に着任いた しました。前任校の広島 市立大学では15年間国 際学部に所属しました。 大阪大学文学部英文学科 の出身で、京都大学には 大学院生として在籍しま した。博士後期課程に進 学した年の夏にアイルラ

ンドの首都ダブリンの University College Dublin に留学しました。

京都とつながりができるきっかけは、大学生の頃に初めて参加した京都でのイェイツ研究会でした。W.B.イェイツはアイルランドのノーベル賞詩人のひとりで、英文学の授業で出会いました。この詩人が編纂したアイルランドの妖精物語や民話を面白いと思い、妖精や民間信仰の要素が色濃いイェイツ初期の作品を中心に読み、卒論を書きました。妖精に出会おうとアイルランドで一人旅もしました。その時、留学はアイルランドにしよう、と決めました。

当時のイェイツ研究会は京大の吉田南の総合館の南棟に今もある英語中央室で行われていました。土曜の午後、4時間以上かけて一篇か二篇の詩をひたすら読む、という会でした。その会には京大の先生も何人も参加しておられました。一篇の詩を成り立たせる一つ一つの言葉の重みと深みを知り、言葉の力の秘密を垣間見ました。ここで私は、大学院は京大に、と考えはじめ、そう決めました。

京都には密かに長いアイルランド研究の伝統があります。アイルランド語詩人のヌーラ・ニゴーノルに初めて会ったのは、京大での朗読会でした。アイルランド語はケルト語の一つで、英語とは文法も音もまったく違うのみならず、「少数者言語」として絶滅の危機が言われて久しい言葉です。ニゴーノルの詩の朗読会では詩人の声と迫力に圧倒され、その時「いつかアイルランド語ができるよ

うになりたい」とぼんやりと考えました。アイルランド留学中に初級クラスや夏期講習会でアイルランド語を少しずつ学び始めました。ニゴーノルのアイルランド語詩を自力で読むのが夢でした。留学を終えてからは「京都アイルランド語研究会」を立ち上げ、これは今も続いています。夏には毎年アイルランド語使用地区にアイルランド語を学びに出かけ、それは10年続きました。アイルランド語の残る村は故郷の瀬戸内海を思わせるのどかな海辺にありました。

初めて出した本は人魚をめぐるニゴーノルの詩の訳詩集でした。アイルランドの英語はアイルランド語の影響を強く受けており、アイルランド語の知識なしにはわからないようなところもあります。そして研究のために英語の文学作品や資料を入念に読み込み、また英語教師として英語を教える一方で、同時に少数者言語とその文学と関わり続けることは、私にとって重要な意味を持ち続けてきました。アイルランド語を学ぶにあたってもまず英語が必要でした。英語は少数者言語を演じてきたとも言われますが、そういった言語を守る役目も果たせます。

さまざまな出会いがあって、今も尊敬する先生 方からさまざまな助言をいただいてきました。時 に挫折し、時に希望を見出し、研究を続けてきま した。奇しくもまた京都に戻ってきました。どの 出会いが欠けていても、今ここで教鞭を取って と思います。アイルランドに縁の深い大や文学 アメリカにもアイルランドに縁の深い大やなありれたくさんいます。華々しい研究分野ではあアイルランド研究者がたくさんいます。本が今までいたが、利野の上壌があり続け、視野の広い 英文学者が育つ上壌があり続け、視野のいただいてきたものを学生さんたちにお返しすべく共に学び、地道に道を切り拓いていきたいと思います。

(いけだ ひろこ)

### 研究のきっかけは、

### 大槻 太毅 (自然科学系)



本年4月より総合人間 学部自然科学系、人間・ 環境学研究科 相関環境 学専攻 物質相関論講座 に助教として着任いたし ました。今後とも皆様の ご指導ご鞭撻の程宜しく お願い致します。

私は、今年の3月に学位を取得したばかりで講義を担当することも初めてのことであり、訪れる様々な出来事に驚きながらもとても充実した日々を送っています。私は広大な関東平野の真ん中で生まれ、大学院を修了するまでずっと関東で生活を送ってきました。それが鴨川を眺め、緑豊かな吉田山に、歴史的な街並みの中を通勤する日々に変わり、少し不思議な気分に浸りながらも京都で研究できる喜びを感じています。

私の専門は物性物理学の実験的な研究です。物質中では1cm³あたり約10²³個の原子が規則的に配列し、それに付随する数多の電子が互いに相関し合うことで驚くべき程に多彩な性質を示します。そして時にその膨大な数からは想像も出来ないほど非常に秩序だった状態(電荷・軌道秩序、磁性や超伝導など)が形成されます。そのような秩序がどのようにして起きるか、どのような特異な性質が誘起されるのか、その解明を目指し研究を行っています。物理学は基本的に対象に何らかの外場を加えることで得られる様々な応答を調べるということをします。私の研究では物質に光を当てることで物質から飛び出てきた電子や光を分析しています。

これまで物性研究を行ってきた私ですが高校の ときから物理学に興味があったわけではなく、大 学進学の際の理系・文系選択もなんとなくという あまりにもぼやっとした理由でした。そんな私が なぜ今に至るかというと学部生のときに受講した 量子力学の講義がきっかけでした。これまで古典 力学に慣れ親しんでいた自分としては世界観が 大きく変わる衝撃を感じた覚えがあります。その 講義を担当する先生が物性物理学を専門としてい たこともありますが、身近に存在する物質をよく 考えてみるとなぜ電気が流れる物や流れない物が あるのか、熱の伝わりやすい物や難い物がなぜあ るのか、どうして磁石はくっ付くのか、など当た り前に存在するけれど実はよくわかっていないも のがいっぱいあるわけです。それらは量子力学の 舞台である原子や電子などが多数集まったことに 起因することを知り、その多彩な性質に惹かれて いったことが今の自分に至るきっかけであったと 思います。何れにせよ、決して真面目な学生では なかった私が現在に至る元々のきっかけは学部生 のときに受講した講義やそれを担当していた教員 にありました。総合人間学部では文系・理系にわ たる幅広い研究分野の第一線で活躍される先生方 が所属されており、様々な講義が開講されていま す。すなわち、きっかけがたくさん転がっている ということです。何かの性質を知ろうとするとき には外場に対するその応答を調べるように、大学 生活を通して様々な分野に触れ、その応答を知る ことで、自分の新たな一面を見つけて貰えればと 思います。

(おおつき だいき)

# uman ntegrated tudies

#### 編集後記

◆『総合人間学部広報』第57号をお届けいたします。今号 は、特集「総人・人環学生研究プロジェクト 2015『はかる』」 と、新しくお迎えした9人の先生方からのメッセージを掲

載しました。学生プロジェクト2件はいずれも熱意に溢れる、また独自の視点からの意欲的な取り組 みです。プロジェクトを主導された活性化委員会の佐野宏先生のご寄稿にも感謝いたします。新任の 先生方はいずれもこれまでのご自分の経緯を踏まえた上で総人・人環に寄せる熱い思いを語っておら れ、頼もしい限りです。総人・人環の一層の発展のために、ともに頑張っていける仲間として歓迎い たします。(F・K)

#### ベトナムの国民的スポーツ「ダーカウ」



左から 競技用・ハノイ型・ サイゴン型 のカウ



ダーカウ・キエンの足技 「ダーソーボン|



歩道は高校体育のダーカウの 試験にも使われる

#### インタビューに応じてくれた総合人間学部卒業生の皆さん



木南陽介さん(平成 10 年卒業)



小野邦彦さん(平成 19 年卒業) 株式会社レノバ代表取締役社長 株式会社坂ノ途中代表取締役



渡辺雅之さん(平成9年卒業) 現 Quipper School 代表



井坂信彦さん(平成9年卒業) 衆議院議員(兵庫1区)

# 人間・環境学研究科 総合人間学部

# 広報委員会